

- ・ テメロ地域の教師の指導と監督をはじめ、カリキュラムの検討や教師の資源向上のための研修を実施している。
 - ・ 女性教師が多く、出産休暇は40日と日本より少なく、労働条件は厳しい。
 - ・ 教科書は無償で子供達に支給される。
 - ・ 複合多民族社会であるため、教育には、民族上あるいは宗教上の問題がある。
- 12 : 00 ○SAHARIMAN 氏宅に戻り、荷物を積み込み、一路クアラルンプールへ向けて出発。ホームステイプログラムは終了した。
- ・ 車の窓から見えるうっそうとしたジャングルや茶色く濁った川もこれで見納めである。
- 13 : 40 ・ ゲンティンハイランド近くのドライブインで昼食。
- 15 : 00 ・ 渋滞の始まりかけたクアラルンプール着。
- ・ 15日に「農業公園」へ行くことを急遽追加したが、2時間遅れでクアラルンプールへ着いたために、農業公園見学を取り止めて、プラトウ通りのショッピングセンター“ザ・モール”で休息と買い物にあてる。
- 16 : 50 ・ ホリデイ・イン着。チェックイン
- ・ SAHARIMAN 氏は歓迎会での再開を約して、テメロに帰った。
 - ・ 農業公園を取り止めたために、現地で我々を待っていた PAMAJA メンバーがホテルに訪ねてきた。
- 18 : 10 ・ PAMAJA メンバーとともに市内散策。
- ・ 駒井団長は日曜日の雨にあたり体調をくずし、ホテルで休養。
 - ・ 「カリヤネカ」マレーシアの各州の特産品を展示販売している店をのぞく。
 - ・ 2班に別れ、それぞれ市内散策をし、センターマーケットで再びおちあう。
- 20 : 30 ・ センターマーケット近くの“シェーキーズ”で夕食。
- ・ 我々日本人は、久しぶりにピザやパスタ類を口にして大喜び、しかし、PAMAJA メンバーは宗教上の理由からあまりこの店の店には入らない。
- 21 : 15 ・ 再びチャイナタウンで買い物。
- 23 : 30 ・ ホテルへ戻り、ホームステイの状況等についてミーティングをした後、解散。久しぶりにゆっくりシャワーを浴びてぐっすり寝ることができた。
- 12月18日(火) (ネクタイ着用)
- 8 : 30 ・ ホテル・ロビー集合
- 8 : 50 ○水産開発公団訪問
- ・ セミナー「農業振興と農村青年活動」については別に報告。
 - ・ スライドによりマレーシアの漁業・水産業がマレイ語でしかも日本の古い

歌謡曲の音楽つきで紹介があった。

- ・一番多く養殖されているのはガルバという鯛の一種であり、海水が暖かいために、日本の鯛とはすこし形が違う。また、ロブスターや赤貝も捕獲するほかに養殖も行っている。
- ・魚介類の輸出入は、為替の関係で、シンガポールへは輸出し、タイからは輸入している。
- ・日本は魚離れが若い人を中心に進んでいるが、マレーシアでは肉類は価格が高いこともあり、魚は安くて栄養の点からも消費量は多い。
- ・最近では若い人が漁業をしなくなってきたために、漁業従事者の高齢化が進んでいることが一番の問題である。
- ・パネルや魚の水槽がある展示室を見学する。
- ・招へい事業では、水産関係者の対応が、日本の行政組織の関係で、難しいことは理解しているが、これからも機会があれば公団から水産関係者を派遣したいとの意向であった。

13 : 00 ・セミナーの後、別室で昼食を取りしばし歓談。

13 : 30 ・記念品の交換を行い、写真撮影。セミナー終了。ホテルに戻る。

14 : 20 ○市内見学 (服装自由)

- ・①国立競技場 ②ムルデカ・サッカー場 ③ジャメック回教寺院
- ④パティック店 ⑤独立記念碑 ⑥国立博物館 ⑦免税店

19 : 30 ・ホテルに戻る。

20 : 00 ・ホテル・ロビー集合。

20 : 10 ○「歓迎レセプション」 (ネクタイ着用)

- ・既に7日が過ぎての歓迎レセプションには多少戸惑いがある。
- ・PAMAJA メンバー約100名が出席。
- ・夕食の後、歓談。PAMAJA 会長より団員全員に記念品贈呈。

23 : 10 ・ホテル着。明日の日程を確認した後、解散。

12月19日(水)

7 : 30 ・マラッカへ向けて出発。

10 : 00 ・マラッカ着

- ・「ミニマレーシア」前のレストランで遅い朝食。

10 : 30 ○「ミニマレーシア」見学

- ・マレーシアを構成する13州の代表的な古い民家を、一つづつ靴を脱いで中を見学する。家の中は人形でそれぞれの時代の生活様式を現し、台所用品

や農業、漁業の工具等が展示してある。

12 : 10 ○「ワニ園」見学

13 : 10 ○州副知事との昼食（ネクタイ着用）

14 : 20 ○マラッカ州開発公社表敬訪問

- ・副知事 DATUK から歓迎の挨拶の後、公団の活動についてパネルを用いて説明があった。

- ・工業化を推進していて、受け入れ・誘致に積極的であり、海岸を中心としたリゾート地や歴史的遺産による観光産業から、工業・製造業を基盤とした経済の再編成に力を入れているため、日本企業の進出も著しい。ただ、工業化を推進するためのプロジェクトはあるが、農業に関するプロジェクトはない。

- ・副知事から州の青少年の相互交流を行ってほしいという要請があった。

- ・記念品を交換し、写真撮影。

15 : 45 ・民芸品店で買い物。

- ・PAMAJA より団員にバティックのプレゼントがあった。

17 : 00 ・マラッカ州王の宮殿見学。



- ・昔のまま残してあり、全て木造の3階建。当時の王族の生活がしのばれる。

夜の 8 時から周辺の古い建物やサンチャゴ砦等をライトアップし、サウンド・アンド・ライトショウが行われる。

- 17 : 30 ・サンチャゴ砦見学。
・宮殿近くの見晴らしの良い砦。かつてのポルトガルの要塞。砲台が残っていた。頂上に宣教師フランシスコ・ザビエルの像がひっそりと建っていたのが印象的だった。
- 18 : 30 ・土産物店散策
・テントの軒が連なるように両側に続き、観光客は肩を触れながら土産を買っていた。
- 19 : 40 ・セルカム・グリル・フィッシュにて夕食。
・マラッカの PAMAJA メンバーが一同に会し人数はとてもつかめない。午前中案内してくれた人もきていた。
- 22 : 20 ・ハナピア氏宅でしばし休憩。
- 01 : 05 ・ホテル着。全員疲労困憊のため、ごく簡単な打ち合わせをして解散。

12月20日(木)

・午前中はフリー・タイム。PAMAJA メンバーと市内見学に出かけ、友好を深める者、土産を買いに市内を奔走する者、部屋で休息を取る者、知人に会う者などそれぞれのフリータイムを過ごした。

- 12 : 50 ○ PAMAJA 及び PSD に対する感謝の昼食会 (ネクタイ着用)
・市内のゴルフ場近くの水上中華料理店ヘラヤンで、滞在中特に世話になった PSD WAHAB 氏と PAMAJA 事務局長 SAHARIMAN 氏をはじめ PAMAJA メンバーを支えた昼食会。国際青少年センターの SOFFIAN 所長も同席してくれ楽しい時を過ごす。
- 14 : 30 ○ JICA マレーシア事務所で評価報告会
・駒澤次長に対し、プログラムについての実施経過とその評価を行った。
・団員一同の声としてスケジュールが非常にきつかったことがまず挙げられた。しかし、PAMAJA メンバーの献身的とも思える協力には、ただただ頭の下がる思いである。
・この調査を通して、国際交流について、マレーシア人のホスピタリティー溢れる国民性に触れたこと、10日間もの長い間行動を共にしたことにより、一層堅く結ばれた友情等、それぞれの立場で意見交換ができ、この調査の成果がはかりしれなく大きいことを報告した。
- 15 : 30 ○ 在マレーシア日本大使館表敬訪問及び報告

- ・伊藤二等書記官に対して、プログラムの中で帰国青年と随所で交流できたことをまず報告。青年招へい事業にぜひ参加したいと言う青年に沢山会ったことから、マレイシア青年の中での評価の高いことがうかがえる。この事業が継続して行われることをお願いした。
- 17 : 00 ・セントラル・マーケット及びチャイナ・タウン散策
- 19 : 00 ・ホテルに戻る。
- 21 : 10 ○「さよならパーティー」
 - ・ホテル2階の宴会場で約50名の参加者を得て開催。
 - ・PAMAJA 会長 JAMIL 氏の挨拶の後、駒井団長から滞在中の謝辞。
 - ・食事の後、マレイシアから民族舞踊と歌の披露、今日は久し振りにアルコールも入り日本側も負けじと歌でお返しをする。
 - ・各テーブルごとに新しい友情の絆が広がる。それぞれが再開を約している。
- 23 : 00 ・パーティー終了、各自部屋に戻る。
- 02 : 00 ・プログラムの評価と反省を団員だけで行う。
 - ・事業のねらい、ホームステイを含む全般について、今後の事業のあり方、報告書の作成にいたるまで、解放感と充実感も伴って大いに議論する。
- 12月20日(金)
 - 8 : 30 ・ホテルをチェックアウト、一路スパン国際空港へ向かう。
 - 9 : 15 ・搭乗手続きを済ませ、2階のグリルで見送りにきてくれた PAMAJA メンバー多数と軽い朝食。
 - 12 : 15 ・マレイシア航空70便で帰国の途につく(都合により飛行機は1時間20分遅れで離陸する)。
 - 16 : 15 ・台北着 気温19度 マレイシアから来ると涼しく感じる。
 - 17 : 25 ・台北発 機内は空いていた。
 - 21 : 05 ・新東京国際空港着。
 - 22 : 30 ・入国審査、税関通過後、最後の打ち合わせを行い、解散。
 - ・外に出たら、気温7度、雨が降ったようで外へ出たら寒くてふるえた。
 - ・マレイシアでの心暖まる思い出を胸にいつの日かの再会を約してそれぞれ家路に着く。

1-3 主要面談者

① JICA マレーシア事務所

岡部和夫所長，駒澤彰夫次長，湊芳郎次長，西本高司次長

② 人事院

Mr. Wahab Mohd Yasin 東方政策課副部長

③ 青少年スポーツ省

Mr. Suroya Selamat 青少年局

Mr. Mohd Nawawi Mohd Arshad 青少年育成課長

④ 連邦農業市場公団

Mr. Abu Bakar Bin Hamid 次長（市場開発担当）

Mr. Mohamed Zakaria Bin Mohamed Yahya 人材育成講師

⑤ マレーシア森林研究所

Mr. Jaffar 所長

Dr. Tatu Ishihara JICA 専門家

Ms. Habsah Marjuni 広報担当官

⑥ マラッカ州開発公社

Mr. Datuk Mohd. Ali Rustam 州副知事

Mr. Zaini Md. Nor 工業担当

⑦ 水産開発公団

Mr. Tuan Haji Sha' aya Bin Othman 次長（広報担当）

Mr. Mustafa Bin Haji Ahmad 総務部長

Mr. Hosni Bin Ahmad 企画担当官

⑧ PAMAJA（同窓会）

Mr. Jamil Mohd Noor 会長

Mr. Sahariman B. Hamdan 事務局長

⑨ 日本大使館

伊藤光子二等書記官

2. 調査の要約

人事院。JICA から招へい事業の取り組みについて、同窓会からは、半年あまりの活動の実績をもとに、現状の説明を受けた。

今回、次の2点に調査の重点をおいた。①帰国青年の活動、特に同窓会について、②再交流について。

① については帰国青年同窓会の項を参照願います。

② 再交流について

人事院の話しでは、日本、韓国、ASEAN 諸国からの受け入れ依頼については、その全てを同窓会にお願いしている。同窓会には充分とはいえないが予算措置を講じているので、現在は何とかやっつけている。

現在、同窓会がかかわっているのは、歓迎会及びホームステイが主体となっている。将来的には、滞在中の全ての日程を引き受けたいとの意向をもっている。

偶然ではあるが、松村団員が熊本県小国町木工クラブからの「マレーシア植林プログラム」を携えてきた。人事院 WAHAB 氏、同窓会事務局長 SAHARIMAN 氏を交え話しあった結果、出迎えから見送りまでの全日程の世話をすることとなった。調査チームが帰国するまでに、植林をする候補地の選定と滞在中の所要経費（幼木の購入代を含む）の算出をお願いした。帰国後、小国町には直ちに経過を連絡した。小国町の場合は、ねらい、時期、経費の負担について明確になっていたため、結論が早く出た。

日本からマレーシアへの再交流は、最初に人事院に依頼をすることが最良の方法と判断される。

マレーシアから日本への再交流は、それぞれの団体または個人が個別に対応しているのが現状であるが、毎年、継続的に受け入れることになっていないため、予算措置を講じていないので、経済的な負担を伴うこともあり、今後の課題であろう。

3. 現地活動報告

3-1 表敬・訪問先における意見交換内容

① JICA マレーシア事務所

配布された資料に基づき西本次長より説明を受けた。

わが国のマレーシアに対する技術協力は、毎年順調な伸びを示している。1989年のJICAベースの技術協力実績は45.6億円で、全体(1,016.2億円)の4.5%を占め、援助供与国中の第5位である。マレーシアから見た場合、技術協力に関し、わが国は1987年に引き続き1989年と連続して最大の援助国となっている。

1990年度の技術協力は、研修員の受け入れは499名(内訳:一般研修員204名、東方政策研修員120名、第三国研修75名)、青年招へい事業は150名、専門家派遣62名、青年海外協力隊88名(内訳:西マレーシア(半島マレーシア)52名、サバ、サラワク36名)。特に、農林水産関係29名が各地で活躍している。

1990年は“マレーシア観光年”であり政府が非常に力を入れた結果、例年になく観光客が多かったが、反面物価も上昇した。

青年招へい事業は、公務員を中心に多くの民間人も参加しているが、評価はとて高い。

日本の理解者がマレーシア全国の各分野にいることは、両国の相互理解にとってこのうえない大きな力となっている。

人事院が指導している同窓会も良く組織され、今や742名の会員となっている。特に、今回の調査チームの日程作成については、同窓会の強い希望により、通訳の手配等を含め、スケジュールを同窓会に任せた。

②人事院

青年招へい事業が日本マレーシア両国の相互理解に果している役割は、はかり知れなく大きく、人事院は、同じ体験をした仲間が全国各地にいることによって、新しい情報のネットワークがPAMAJAをとおしてできていることについても高く評価している。

派遣に当っては、外務省、JICAから多大の援助を得ているが、日本の民間企業からも多くの協力を得ている。

派遣するねらいは、両国の友情を深めること、身をもって日本を体験し、帰国後、マレーシアの発展に生かすことである。

派遣に当っては申請書をもとに書類選考をし、その後、IQテストと面接をしていることから人事院は自信をもって送り出している。

青年招へい事業で派遣される女性が少ないのは、クアラルンプールを除けば、女性の社会進出がまだ少ないために、他の地域からの派遣は難しいとのことであった。

同窓会は、公務員を主体として組織されている。人事院は活動資金の一部を助成している。自主的に良く運営されているので、出来る限りの援助をしていきたい。

今回のアフターケア調査が青年招へい事業に活かされることを期待したい。

③ 青年スポーツ省

マレーシアは、マレー人、中国人、インド人からなる複合多民族国家であるため、何事に付け一つにまとめることが難しい。国教はイスラム教と定められているが、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教も混在しているため、教育・スポーツ等諸施策を同一レベルで推進していくことはかなり困難である。

いずれにしても、青少年の数に比べ、指導者が少ないので、青年のリーダーを育成することが急務である。

マレーシアの伝統的なスポーツは、シラットとセバタクロがあげられる。シラットはマレーシア全土で100種類以上あるが、代表的なものは5～6種類であり、文化とスポーツは密接に関連しているため、今は結婚式や祭事にシラットが披露されること

が多い。シラットの保存・継承のために地域によっては学校で教えている。

④ 日本大使館

青年招へい事業で来日した青年がマレーシアでどのような活動をしているのかを見ることが、とても意義のあることである。

日本の受入体制は、組織化され良くできている。マレーシア青年はホームステイを一番評価している。日本の受入家庭にとっても意義があり、決して片側通行ではない。

招へい事業の人選は非常に厳しく、出発前の事前研修では、ディスカッションの訓練があり、従ってある程度出来上がったものをもって、日本へ行く。目的意識が明確になっている。

参加者は公務員が主体で、社会的にも地位が高い、意見もはっきりと自分の言葉で語れる。一方合宿プログラムでは、日本青年には準備もあまりなく、消極的で発言が少ない。今後、合宿セミナーにおけるディスカッションを再検討できれば、もっと充実したプログラムとなる。

3-2 帰国青年同窓会等の活動状況

帰国青年の同窓会（PAMAJA）の活動

毎年青年招へい事業により150名の青年が派遣されている。派遣者は、マレーシア政府人事院の東方政策課（PSD）により厳選された若者である。同窓会は1987年8月に社団法人として認可された団体であり、会員数は742名（組織化率83%、招へい者総数895名）にのぼり、ASEAN各国の同窓会の中でも特に活発に活動している。

活動の目的は、①会員間で文化、教育、社会福祉などの社会活動をつうじて、会員の相互理解と友好を深めるとともに連絡・協調をはかる。②マレーシア政府人事院の東方政策部とJICAに協力し、マレーシア、日本の青年との友好親善をはかる。③会員相互の「マレーシアを愛する」心を育てる（愛国精神の高揚）。

活動の主なものは、①青年招へい事業の現地オリエンテーションに協力する。②国際親善と相互理解を深めるために他のASEAN諸国に青年を派遣すると同時に連絡、協調をはかる。③各会員相互のコミュニケーションをはかるため、各種の活動を行う。④アフターケア調査チームのホストとして協力するとともに、日本青年のマレーシア訪問の受け入れに協力する。

1990年5月より12月までの活動は次のとおり

- ① 招へい事業派遣前オリエンテーション及びブリーフィング 4回
- ② 招へい事業帰国報告会 4回
- ③ アフターケア調査チーム受け入れ
- ④ 日本青年の受け入れ 3回（宮崎県青少年、長崎県大学生、東京都高校生）

⑤ 会議及び集会 総会1回，執行部会1回，役員会7回，パーティー5回

⑥ 派遣事業 アセアンユースキャンプ（シンガポール）

大阪府（10人），岡山県（2人）

PAMAJAの組織はしっかりしており，結束力が強く，各方面で活躍している青年である。4名の執行部と，10名の役員で構成され，会員の一人一人が，この招へい事業に選ばれて参加したという自信と誇りが，ボランティア活動の源泉であろう。どの地方に行っても，常に多くの会員が集まり，このように個人レベルの協力によって支えられている同窓会活動は大変素晴らしい。

同窓会の最大の悩みは，事務局を人事院東方政策課におき，全てボランティアで事業を行っているため，事務局長の忙しさは大変なものである。今後さらに組織活動を発展させて行くためには，同窓会は，運営資金を確保し，事務局を独立させ，専従のスタッフをおくことが当面の最重要課題と思われる。将来は，旅行業取扱の免許を取得して収益事業を行いたい希望があるようだ。



3-3 セミナー実施状況

12月18日（火）8：30～13：30（会場：水産開発公団会議室）

◎マレーシア側帰国青年参加者

Ms. Puan Jaiyah bte Shahbuidh
 Mr. Mohd Sahlan bin Mahonoon
 Mr. Mohd Azumi Modhd Noor
 Mr. Encik Hosni bin Ahmad
 Mr. Puan Nor Ihsan Ismail
 Mr. Mohd Zakaria b. Mohd Yahya
 Ms. Cik Seniati Hj Jais
 Mr. Encik Harapia b. Hji Omar

◎

1990年 テーマB 1班
 1990年 テーマB 1班
 1990年 テーマB 1班
 1990年 テーマB 1班
 1990年 テーマB 2班
 テーマB 2班
 1990年 テーマB 2班

日本側

1班 駒井
 1班 野口
 2班 松村
 2班 中村
 2班 鈴木

◎オブザーバー

漆 JICA マレーシア事務所次長
 水産公団関係者

〔実施方法〕

当初セミナーは「農業振興と農村青年活動」のテーマで行う予定であったが、マレーシア側の希望により、テーマを2つに分け、2グループで行うこととなった。通訳は MUSTAFA 氏がつとめた。MUSTAFA 氏は鹿児島大学に2年間漁業関係で留学していた陽気な人であった。

〔テーマ〕

- 1班「農村青年の経済的自立を援助するプログラム」
- 2班「農村青年活動」

〔話し合われた内容〕

1班(日本とマレーシアの農業のおかれている状況が違うことから話し合いは難しかった。)

いろいろな意見が出されたが、要約すると次のとおり。

1. 自然・環境条件を正しく認識する。
2. 教育レベルの向上と技術の習熟。
3. 共同化と組織化をはかる。
4. 資金の融資(市中銀行、協同組合、国)。
5. 団(産)地化をはかる。
6. 機械化をはかる。
7. 国内外の企業との協力(合併)。
8. 普及。
9. 観光・レクリエーション等とのタイアップ。

10. 視野を広めるための国内外での研修。
11. 情報センターの活用（市場、天候、技術等）。

2班（時間の制約があり、十分な討議が出来なかったが、双方活発な意見の交換が行われた。）

松村団員より主に熊本県の農村青年活動を紹介し、マレーシアの活動についての紹介があった。

- ・日本の4Hクラブ（Head, Heart, Hands, Health）と同じように4Bクラブがある。Bはマレー語の頭文字であり、英語ではUnit, Service, Ready, Successである。
- ・4Bクラブは政府の指導の下にどの州でもほぼ同じレベルで活動している。
- ・女性の占める割合は日本と同じでかなり低い。日本の0.3%に対し8%位。年齢は日本の20～25歳に対し18～40歳（男女共通）である。
- ・活動内容は、男女共に同じで、仕事に関することばかりでなく、交流を中心にスポーツ、勉強会、お祭り等生活全般にわたって幅広くボランティア活動を行っている。
- ・4Bクラブ活動には政府より活動費が補助されている。

3-4 ホームステイ実施状況

12月14日（金）～17日（月）までの3泊4日間にわたりパハン州テメロのPAMAJAの会員宅で実施された。

★松村 美代子

① 受け入れ家庭とその家族構成

Zawilah bt Md. Noor (30才) 両親と妹2人 (19才と8才)

住所. NO. F 457, Felda Jangka 18, 28030 Temerloh, Pahang Darul Makmur,
West Malaysia

(Home) Clerk, Social and Welfare, Felda Jangka 18, 28030 Pemeerloh, Pahang
Darul Makmur (Office)

② 住まいと食事の内容

*食 事：毎回家族と一緒に食事をし、料理は全てマレー料理、ほとんどスプーンとフォークで食べた。手で食べたのは、2回程であった。バナナの揚げ菓子がよく食卓に並んだが、とてもおいしかった。ケーキの色使いには驚いた。日本ではちょっと考えられない色使いであった。

*住まい：農村集落の中にあり、平家の建物で高床式であった。電気は通っていたが蛍光灯が二本しかなく、全体に薄暗いという感じがした。夜10時過ぎ頃になると電灯は消えランプの生活であった。私には彼女の部屋を貸

してくれ、夜は蚊取線香をつけてくれた。

*その他：家には水道がなく、家の裏に貯水槽があり、その水で生活用水は全部賄っていたみたいであった。電化製品もテレビはあったが冷蔵庫はなかった。トイレは水洗であったが、後にホームステイを受入れるためにわざわざ作ったということが解り、大変恐縮した。それに加え家は50万で建てられるのにトイレ部分は10万かけて増築したという話を聞いて驚いてしまった。

③ 感想

- ・滞在3日目に朝から市場へ行く予定だったが、雨で駄目になり、その日は伝統的な遊びである「チョンカー」を子供達とやり楽しんだ。この日の午後は近所の人達が集まり、お茶会を開いてくれた。そして私はバジユクロンという民族衣装を着せてもらった。すこし小さかったが着心地はよく、その後のパーティでも何回となく着用した。
- ・ホームステイを通して、宗教上で困ったりしたことはほとんどなかった。言葉は私自信が英語を話せないため、逆にマレー語を習ったりしてとても楽しかった。家族や彼女の友達からたくさんのお土産を頂き喜びと感謝で一杯のホームステイであった。

① 受入れ家庭と家族の構成

Mr. Abdullah Hj Rahmat 37才

(奥さん、長女 ノロフダ 7才、次女 ノルルアイン 5才、長男 アノラーン 3才、三女 3ヶ月、メイドさん)

(連邦土地開発公団社会部)

Community Development Officer, FELDA

(Home) Staff Qrts. Felda Wilayah Pahaug Teugah Sg. Tekam 27000 Jekautut Pahaug Darul Makmur. Tel : 09 - 478437

② 住まいと食事の内容

*住まい：パハン州ジュランチュット市

職場から歩いて5分の平屋1戸建で広々とした3LDK 公務員住宅、地上より1m高床式になっていたが全体的には西欧風で子供部屋を使わせてもらった。

*食 事：ご飯とおかず(魚、野菜、鶏肉)を手で混ぜながら食べる基本的なマレイシア料理や、野菜スープにうどんに似た麺をいれたもの、えびの天ぷら等を家族一緒においしくいただいた。

③ 体 験

- ・ホームステイ中のプログラムもホストファミリーと一緒にだったので、家族の一員として行動できてうれしかった。
- ・フリーのときは子供達にマレイシアの伝統的な遊びの「チョンカー」を習い、私も折り紙等を紹介したが、特に折り鶴は大好評だった。
- ・コミュニケーションはホストファザーは英語が上手だったので通訳になってもらい、ホストマザーと子供達からマレイシア語を習うという、さながら体験的マレイシア語学習の日々であった。しかし、ホストファザーがいないときに子供達から質問されても答えられず、マラッカから電話を入れたときは、お礼の言葉が上手に言えなくて残念だった。
- ・宗教面ではホストマザーがイスラム教の先生をされていることから信仰心が厚く、必ず1日1回はモスクにお祈りに行っている。私も3日間モスクに同行し、生活と結びついているイスラム教を、目の当たりに見ることができた。
- ・生活面で唯一困ったものと言えば水浴びの習慣であった。帰宅するとシャワー代わりにすぐ勧められるのだが、いくら熱帯地方といっても雨季のせいか水は冷たく、震えながら行水をした。翌日からは家の人が気を使って、親切にやかんでお湯を沸かしてく

れた。

・プレゼントはアクセサリやバティック・Tシャツ等を家族一人ずつからいただいた。

★野口 栄一

①受け入れ家族とその家族構成

Mr. SOSU BIN ISHAIL 25才

(高等学校事務員) (両親, 妹3人, 弟1人 計7人)

office : Sekolah Menengah Jengka 18, 28030 Temerlor, Pahang Darul Makmur

West Malaysia

Residence : NO 336 Block N (2) Jengka 18, 28030 Temerloh Pahang Darul Makmura

West Malaysia

②住まいと食事の内容

*住まい : テメロ市内から車で約1時間 Jengka に住んでおり, 農村地帯で電気・水道もなくローソクとランプの生活である。

*食 事 : マレー料理で家族と一緒にマレーシアの習慣にしたがって手で食べた。特に美味しいとは思わなかった。

③体験と感想

- ・部屋は狭く長男と同じベッドだったので, ゆっくり眠ることが出来なかった。
- ・家族の人達と話しをしたかったが, マレー語しか話せず十分なコミュニケーションがとれなく, 時には時間が経つのが長く感じられた。
- ・夜, 長男のバイクで友達の家を訪問し, 多くの友人ができた。だれともすぐ打ちつけて楽しい時間が持てた。なにか日本の友達と話しているように思えたし, 人間的にいい人が多く, 好感が持てた。
- ・水道がなく, ローソクとランプの生活だが特に不自由もなく, すぐ馴れてしまい, 人間なんてどこへ行っても, それなりに生活して行けるものだと思った。
- ・ホームステイの生活は3日間と短かったが, 家族にとけこみマレーシアの農村生活を体験でき有意義な生活が送れたことを感謝している。

★鈴木 達也

① 受入家族とその家族構成

MOHD. ZAMRI BIN MOHD. SHAM 氏 27才 ヤシ園の事務官

きれいで明るい奥さん 24才, 2才の長女に, 生後6ヶ月の次女, という4人家族。

② 住まい

今回のホームステイは、パハン州のテメロ近辺で行われた。ここは、いわば、マレーシアの中央山脈の一角であり、まわりはほとんどジャングル。近年、そのジャングルを切り開き市街化を進めている地方都市である。といっても、幹線道路はきちんと舗装されており、電気も通っているが、クアラルンプールのようなわけにはいかない。

今回の我々のプログラムを企画したPAMAJAの事務局長であるSAHARIMAN B. HAMDAN氏が、この地域の出身であり、彼の家をキーステーションとして各々分散した形でホームステイを行った。私のホストの家は、そのSAHARIMAN氏の家からバイクで約30分、未舗装道路（泥道）を走ったところにある。初日こそ、スーツケースがあったため、ホストの親戚筋の人に車で自宅まで送ってもらったが、あとは、バイク中心の移動。バイクも車もとばすことしきり。特に車は、一般道だというのに時速100kmを優に超えて走っている。

何年ぶりだろう……私と同じ名前である。「SUZUKI」の125ccバイクの背にまたがり悪路をつ走ったのは……普段慣れていない体型（サドルが小さいためほぼ180度に足を開く）をとったり、おまけにしょぼ降る雨で、毎日、全身びしょり。はねた赤土で着ているものも泥だらけ。

ホストの彼はヤシ園の事務官をしており、住まいはオフィスと30mも離れていない。ヤシ園の敷地内には、アーケット・ポリス・労働者の80%を占めているインド人の住居等があり、彼の家は、その一番奥にある。平屋であり、建物全体は高床式・トイレ・バス・洗面所と食堂が一段とさがっている。つまり、そこは、1階。他は中2階と考えればよい。

今回は、私のために夫婦の部屋をまるまる一部屋提供してくれた。広さは、日本の六畳程度。ダブルサイズのベットが1つ。後はガランとしており、お世辞にもきれいとはいえない。

ピンクのベットカバーが妙に光っていた。とりあえず、床に寝るのでは無くて一安心。ちなみに、夫婦は、子供達と一緒に寝たもよう。各部屋とも電気設備あり。窓には網戸がしてあり、蚊、ハエのたぐいが入らないよう工夫はしてあるものの、やはり蚊は多い。夜は持参の蚊取線香をたてて寝た。蚊も慣れていないせいかバタバタと落ちていた。中には、見慣れぬちよっと大きめの虫も落ちてびっくり。15cmほどの白いヤモリも時おり目にし、ネズミもチュューチュューと鳴いている。ちなみに、イスラム教の教えで、犬はいけなものとされているらしく、どこへ行ってもほとんど見かけなかった。番犬はおろか野良犬さえいない。唯一、見かけたのは、空港の麻薬捜査犬だけであった。

③ 日程

12月14日(金)

19:00 ・ホームステイ先到着

- ・生まれて初めてのホームステイ。しかも、3宿4泊の長丁場。興味よりも不安が先に立っていた。先ほどまでは、他のメンバーと一緒にだったが、今はもう一人。こうなりゃ度胸を決めるつきあない。と思っていたら予想以上の家庭環境で、まずは一安心。
- ・ホスト・ファミリーとの顔合わせ、自己紹介をおこない、日本から大事にもってきたお土産(羽子板他)を渡して、しばし歓談。喜んでもらった。
- ・運が良いのか悪いのか、彼も私同様、英語があまり得意ではない。辞書をひきひき会話を交わす。それでも、何とかつながるもの。
- ・JICAが贈呈した白いアルバムを見せてもらった。集合写真は、ホテルのパーティでとったものと、日本武道館のものしかなく、それをまた大事にとってあり、当時の模様を嬉しそうに話してくれる。
- ・日本武道館からお土産として渡しているペナントも居間の中央に大事に飾ってあった。彼にとっては、よい思い出になっているようで、感動。
- ・夕食。まず、ホストと私。次に奥さんと子供。全員揃って食べることはまずないもよう。したがって、全部を食べてしまうと、奥さん達の食べるものがなくなってしまう。
- ・今までの食事にくらべれば、非常に質素。ごはんにかレー類をかけて食べるお馴染みのマレー・スタイルである。ホストのすすめで、手で食べてみる。けっこうむずかしくうまいかない。従って、以後スプーンを借りて食べることにした。
- ・水道はあるものの、その水を特に浄化しているわけではないらしい。ということは、川の水を単にひいてきているだけという可能性が非常に高い。
- ・従って、そのまま飲むと当然の如くお腹をこわす。ホストは、気を使ってくれ、いったん沸かして、お湯をだしてくれた。
- ・コーヒー・お茶のたぐいは、一般家庭でもよく飲んでいる。市中のレストランと同じく、最初から砂糖が入っている。それも信じられないくらいたくさん。
- ・食後、シャワー。シャワーといってもきちんとした設備があるわけではない。トイレ兼洗面所兼風呂。床は、コンクリートで、サンダルばきで歩く。
- ・通常は、大きなカメに水をため、それを手酌ですくって身体を洗うという

もの。よくみると、そのため水はうす茶色。川の水の色と同じだ……

・ホストは、ここでも気を使ってくれて、わざわざお湯を沸かし、タライに湯を溜めてくれたが、そのやかんが小さいため時間のかかることしきり。しかし、その暖かい配慮に感謝。ぬるま湯を身体にかけただけの簡単なシャワーであったが、一日中働いて汗をかき、雨にも濡れていたため、さっぱりした。

・マレー・スタイルのトイレは、全くもって紙がない。事後、彼等は、水を使って左手で処理するらしい。従って、紙は必携のこと。

23 : 20 ・ジュースを飲みながら、次の日の日程等の話しをし、本日は終了。部屋に戻り荷物をひもとく。

12月15日(土)

5 : 45 ・起床。

・馴れない地での下痢もようやくいえ、連日の疲れもでて、枕が変わったとはいうものの、夕べは比較的よく眠れた。

6 : 30 ・SAHARIMAN 氏の家へむけて、バイクで出発。

・ここで車に乗り換えて、各ホームステイ先をまわり、メンバーをピックアップする。どうやら、私のホームステイ先が終始出発点のようで、常に一番早く出発し一番遅く戻るもよう。

・この辺は、どこを走っても水田が見当たらない。一体どこで、お米を作っているのだろうか？。まわりは、どこもジャングルだらけ。道端には水牛がたむろしている。猿や鳥のなき声は聞こえてくるが、不思議と蝉の声は聞こえない。

・ホストがいうには、「木がお金を稼ぐ」とのこと。確かにヤシの木やゴムの木は、そこいら中に生えている。

(これ以後、メンバー全員によるプログラム)

23 : 30 ・本日すべての日程を終えて、ホームステイ先へ到着。

・コーラとお菓子で、しばし、休憩した後、シャワーを浴び、歓談。

・本日は、マレー人の結婚について、いろいろ語ってくれた。

・女性は、非常に Shy なので、とにかく待つ。絶対に自分から声をかけない。

・男性から気に入った女性に声をかけ、家族を紹介し、十分うちとけあった後に結婚する。ここまでののに早くて1年、通常2~3年。

・女性にとっては、実に控え目な話しであるが、そのようなところは、随所に現れていた。すべてにおいて、女性は、謙虚である。社会全体が、

男性中心にまわっているのだろうか。

- 1 : 30 ・本日のスケジュールについて、話しをして、今日は終了。部屋へ戻る。
・どうも目の調子が悪い。水のせいかもしれないので、持参した抗生物質を飲むことにした。2日後、何とかもとどおりに戻った。

12月16日(日)

- ・明け方4時頃、地をはうような太鼓の音と低い笛の音、人々のどよめきで目がさめる。全身汗びっしょり、心臓は波打っている。何かかと思っ
て、ベットから飛び起き、目をこらして外を見ると、人々が大勢集まっ
て、何かをしているが、はっきり見えない。しかも、これが1時間近く
続いた。
・後で、ホストに聞いてみると、インド人達の「雨止め」のお祈りだとい
う。この時期は、雨が多いため、雨の降らない夜明けを選んで、祈祷を
行う。

9 : 00 ・起床

- ・外は、非常に強い雨。一日中振り続いていた。
・顔を洗って、本日の準備をしていると、ホストの友人達が来る。1人は
ホストの親戚筋の人、もう1人は、この地区のシラットの先生だという。
・4人で朝食。ナシ・ゴレン(マレー・チャーハン)と野菜にチキン。も
ともと、焼き飯は大好きなので、美味しく食べられた。久しぶりにゆっ
くりした朝である。

10 : 30 ・出発

- ・親戚の彼が来てくれたので、助かった。今日は、車にて移動。非常に強
い雨で、道も川も水で溢れている。
・途中、この地域を管轄しているボリスと親戚筋の奥さんがきりもりして
いるミニ・マーケットに立ち寄った後、ロタ細工をしている婦人の所を
訪問。
・彼女もPAMAJAのメンバーであり、彼女の作品は遠く日本やカナダへ輸
出されており、評判が良いとのこと。ジャングルの中の小さな小さな竹
細工工房であった。

11 : 30 ・キーステーションである Sahariman 氏宅到着。

- ・Sahariman 氏は、みんなが選んだリーダーだとメンバーの一人が言っていた。
・確かに、家も豪華であり、トイレから無線電話まで設備も万全。
・私のホストは、本日の夜のショーの準備のため、いったん別れる。

- 12 : 30 ・ 駒井団長と本日夕刻のパーティの料理人を迎えにテメロの街へ行く。
 ・ 本日の予定は、テメロの街の朝市見学と散策、その後、近くの池にて魚釣りの筈だったが、大雨のため中止。
- 14 : 00 ・ Sahariman 氏宅に戻り、昼食。
 ・ 雑談したり、パーティーの準備を手伝ったり、あっという間に夕方。
- 19 : 00 ・ 突然、荷物をとりにホームステイ先へ戻ることになる。
 ・ スーツ・ケースを汗かきかさいそいでまとめる。
 ・ その合い間をぬい、ホストファミリーと写真を撮りちょっと雑談。ホストの家は、マレイシアでは、ニューファミリーの方なのだろうか。奥さんもよく会話に参加する。Sahariman 氏の家では、全くなかった。
 ・ あわただしく、Sahariman 氏宅へ戻る。
 (これ以後、メンバー全員によるプログラム)
- 0 : 10 ・ ホストファミリー宅到着
 ・ ホストの家に行くまでに、1回踏切を渡る。夜中になると、その踏切がロックされてしまう。なぜかという、この踏切をこえると、私有地なので、夜中に賊が忍びこまないようにだという。
 ・ シャワーを浴び、ホスト&ワイフと歓談。最後の晩を楽しむ。
 ・ ホストは、今日のショーがうまくいったので、大満足。何事もなく無事終了したことに非常に満足しており、話しもはずんだ。
 ・ ホスト&ワイフから、いろいろお土産を貰った。有難う。
 ・ 魚のすり身で作ったチップスの素を貰ったので、奥さんを先生にして、真夜中の料理教室。油で揚げるだけの簡単なものだが、あっさりして美味しい。
- 1 : 40 ・ 最後に3日間にわたるお礼を述べ、部屋に戻って、残りの荷物をまとめる。
 ・ 「住めば都」という諺どおり、あわただしいが貴重な経験を得た3日間であった。

12月17日(月)

- 5 : 15 ・ 起床。またもや外は豪雨。
 ・ ホストと共に紅茶とクッキーで簡単な朝食。
- 6 : 00 ・ ホストの用意してくれたジャンパーを着て、重い荷物を背中にしよい、豪雨の中バイクにて出発。送り出してくれた奥さんの笑顔が眩しかった。
 ・ 雨が強くて、30分の道のりが、今日は、なが〜く感じられた。…もうこんな経験は二度とないだろう。…

- ・ Sahariman 氏宅到着。ホストは、雨の中、笑顔で再会を約束し、ここでさよなら…
- ・ 一昨日と同様、車に乗りかえ、各ホームステイ先をまわり、メンバーをピックアップする。

(これ以後、メンバー全員によるプログラム)

★駒井 俊幸

① 受け入れ家庭と家族構成

Mr. SAHARIMAN B. HAMDAN (31才) 夫人 (高校教師), 子供男3人 (4歳, 2歳, 2ヶ月)

住 所: Kampong Ketam 1 28010 Kerdau Menkakab Pahang

勤務先: Sek. Keb. (LKTP) Jengka 23 26400 Bandar Jengka Pahang (小学校副校長)

② 住まいと食事の内容

* 住まい: テメロの中心部より西へ車で約20分、郊外(ジャングル)の白と明るいブルーを基調とした新築(6月)の2階建の広いバルコニーのある家。2階は主人の仕事部屋で、その一角の簡易ベットが提供された。

* 食 事: マレーシアの習慣に従って、手を使って食事。朝はパン、パウンドケーキ、紅茶、パパイヤ。ホームステイ中マレー風の夕食を2回食べたが、いずれもバラエティーに富み、肉、焼き魚、野菜炒め、ご飯(チャーハン)。味は普段より薄目とのことだった。食事は、男性が居間のテーブルで、夫人とは一緒に食事する機会がなかった。

③ 感 想

・ ホストによる個別の日程は16日の日曜日だけであったが、昨夜来の激しい雨が終日降り、とても外出することができない。しかし、この雨の中を朝市に出掛けた。食料品、衣料、工具類等あらゆる物が売られていた。川沿いの道の両側に軒と軒が触れるばかりにテントをはっていた。あまりの激しい雨のために、中にはテントをたたんでいる店もみられた。傘はあったが、全身ビショヌレとなり、体調をくずした。サヨナラパーティーの準備のため、沢山の人が手伝いに来て、家の中はまるで戦場のようなであった。

・ 連日家に帰るのが遅く、ホストと NORDAIN 氏を交えた話し合いは深夜まで及んだ。お互い家族のこと、仕事、社会情勢等多岐にわたった。ただ、残念なことは夫人と話す機会がほとんどなかったことである。

・ ステイ中、夫人の気配りは随所に感じられ、自分の家に居るような気持

ちで過ごすことができた。

- ・今までイスラムの生活様式については、わが家に毎年ホームステイするマレーシア人や、書物をつうじて理解していたつもりであるが、体験するのははじめてである。食事、トイレ、シャワー、鏡（トイレ、シャワー、洗面所が一緒になっていて鏡がない、男性のヒゲ剃りはどこですのか？）等、まごつくことばかりであった。
- ・家（部屋）の構造上の違いは別として、普段の家庭生活を体験できたことがなによりの収穫であった。



4. 調査チーム参加者の感想

★松村 美代子

わたしは熊本県の4Hクラブに所属し、昨年の10月27日より11月8日までの期間マレーシア農村青年（テーマB）を受け入れた。私自身ホストファミリーの一人であった。

この期間中は言葉はあまりつうじなくても、私も4Hクラブ員もマレーシア青年の陽気さに引き込まれ、受け入れる前のさまざまな不安も忘れて、一緒になって、歌って、踊って、交流を深めた。その記憶も新しいあいだに、その青年と再開できる機会を得た。それがこの「アフターケア」であった。英語もろくに話せない私は、参加することにためらいもあったが、青年たちとの再会とマレーシアの農村生活に触れることに期待し、参加す

ることにした。

再会はスパン空港に着くと直ぐに実現した。PAMAJAの皆さんが出迎えに来てくれたが、その中に、熊本県に来たザカリアさんとハナビアさんの顔があり、直ぐ懐かしさで一杯になった。そして私が受け入れたジャイヤさんとも翌日会うことができた。ホテルの私の部屋に訪ねてきたり、セミナーに参加してくれたこともあり、ホームステイを除けば毎日行動を共にした。結局、クアラルンプール近郊に住むメンバー7人と再会でき一安心した。また、私が受け入れたジャイヤさんの家にもホームステイし、翌日、バスでホテルまで帰ってきたことも良き思い出となった。このバスの20分間で見たものはいろいろと興味深かった。朝だったこともあり、通勤する人、窓から見る景色、食べ物の匂い。

マレーシアでは3種類の人種が共に生活しているわけであるから、生活もさまざまである。ジャイヤさんの隣りの家は中国系の人に住み、その隣りはインド系の人に住んでいた。バスの中でも流れる音楽は、インド系の運転手ならインドの音楽が流れ、中国系ならば中国の音楽が流れるそうである。面白いと思ったと同時に、それぞれ個人の生活を大切にしていると感じた。

農村生活に触れるという目的においては、ホームステイプログラムで実現した。パハン州の農村地帯で州都より車で2時間以上離れていた。村に着くまでの周りの景色は、ゴムの木とヤシ油の木ばかりであり、ヤシ油の木のしたで牛が草を食べていた。夜、車で走っていると水牛の群れとよく出会った。マレーシアでは国の管理する土地（ヤシ油、ゴムの木の畑）で働く人が多く、月に2万5千～3万の給料と言うことであった。ヤシ油工場やゴム工場を見学したが、工場で働く人のほうが給料は高いそうだ。農村で働く若い人はほとんどなく、皆都市へ出ていってしまうそうであるが、農村では働く場所もなく低賃金という理由が考えられる。私も農業者の一人として淋しさを感じた。また、私の家では果樹を中心に経営しているため、果物の木をいろいろ見たかったが、あまり見る事が出来ず残念でした。

ホームステイ中の生活は様々なことが刺激的で楽しむことができた。まず、この村には水道が整備されておらず、電気も普及していない家もあった。ホームステイ先ではテレビがあったが、冷蔵庫がなく、電話がなく、水道はもちろんない。「あなたの家には電話はあるか?」という質問を受けた覚えがある。風呂はオケを使って貯水槽の水をかぶるものであったが、2日目からは、ヤカンでお湯を沸かしてくれた。沸かしてくれなくていいと断ったのだが、次の日も沸かしてくれた。実際はすごく助かった。雨季の時期にあたったこともあり、暑い国とはいえ夜になると肌寒く、水をかぶるには“気合”が必要であった。

雨の降った日に、彼女の友達とホンダ・カブに合羽を着て2人乗りをして村の中をあちこち回り、友達の家を訪問したり、友達の家で食事をごちそうになり、そこで初めて

手で食事をした。いろいろと楽しかった。

それぞれの家の庭には植木鉢に植えられた花や木が多く目についた。南国らしいハイビスカスやブーゲンビリアの花が咲き乱れ、日本でいう観葉植物が自生していたり、私にとって興味深いものばかりであった。

プログラム全体をつうじ、宗教上で自分自身が困ったことはなかったが、やはり初めに心配していた言葉の問題は現実にあった。各省庁への表敬など、説明は全部といってよいほど英語であり、英語のできない私は理解できるはずもなく、表敬は私にとって苦痛なものでした。通訳もきちんとした通訳でなく、他のメンバーの人達に聞くしか方法がなく、大変困った。このプログラムに参加する資格の一つとして“英語のできる者”という項目が思い出され、甘かったと思い知らされた気持ちであった。

いろいろあったが、今回参加したことによって改めて自分自身を見つめ直す良い機会となった。また、最初から最後までPAMAJAのメンバーの方々の生き届いた親切さには大変感謝している。

受け入れる方と受け入れられる方と両方を体験したが、自分自身が相手国に行くことにより、かなり理解することができたと思う。

これから先、私の所属する4Hクラブでも、また、私の家でも海外の人々を受け入れる機会があるかと思われるが、今回の体験を次の受け入れの時に役立てていきたい。受け入れる側は相手国をしっかりと勉強しておくことが必要であると痛切に感じた。

最後に、このプログラムに参加するに当たり、さまざまの人々に大変お世話になった、その方々に深く感謝申しあげたい。ありがとうございました。

★野口 栄一

今回アフターケア調査団に参加の依頼をいただいた時、7年前の青年招へい事業のスタートの年に私の家でホームステイしたマレーシア青年を思い出した。

あの時彼等がどんな目的を持ち日本に来たのか考える事もなかったが、マレーシアに行き、その後の彼等の生活ぶりを見たかったので参加させていただいた。

もちろん、彼等の写真をポケットの中に入れマレーシアに向けて出発した。スパン国際空港に着いた私達を出迎えてくれたのは、マレーシアの帰国青年（PAMAJAメンバー）達であった。10日間の日程では、いたる所でPAMAJAのメンバーに会い、大変お世話になった事は忘れもしないし、大変感謝している。また私達の10日間の日程の中で、できるだけ多くの人々に会わせてくれた、色々見せてくれたり、よく考えてあると思った。PAMAJAの組織力と活動内容には感心させられる事が多かったように思う。

日本で農業している私にとって、ホームステイを通じマレーシアの農業事情に触れられた事は勉強になったが、マレーシアの地に足を踏みつけマレーシアの人達と一緒にマレイ

シアの農業体験が出来なかった点は残念であったが、マレーシアの人々の温かさに触れたのでよかったと思う。

10日間を通しマレーシアの人々の生活に密接に結びついているイスラム教についても理解できたと思う。

今後、日本での受け入れ団体やホームステイの対応についても気を使ってあげる事が大切ではないだろうか。私も派米研修生としてアメリカから帰国して10年が経ち、すっかり忘れてしまった英語の再訓練を行い、今後、関係者としてより多くの外国青年を受け入れ、少しでも多くの事を学び帰国してもらいたいと思う。

最後に私の捜していたマレーシアの青年とは残念ながら会うことは出来なかったが、また後日再会したいと思う。

★中村 貴子

初めて訪れたマレーシアは緑の多い予想以上に美しい国で、道路も良く整備されていた。人々はマレー系、中国系、インド系からなる複合国家であり、それぞれ固有の文化を持ちながら共存する不思議な国だった。マレーシアの人々は5年10年後はもっと素晴らしい国になると言っていたが、その通り勢いを感じる事ができた。

今回のアフターケアに参加することができて、初めて招へい青年の来日時の心情を察する事ができた。と言うのも、プログラムの終わりに行われる評価会で出される青年の要望の中に同感する点が少なくなかったのである。代表的なものを以下にあげると

① ホストファミリーに関する情報の早期入手

ホームステイ先の家族構成等は最も早く知りたいものであり、特にマレーシアでは家族1人ずつお土産を用意するのは慣例であった。

② 宗教の理解

宗教心をあまり持たない私にとってイスラム教は想像を超えるものがあつた。来日中は難しいと思われるが、お祈りの時間の重要性を痛感した。

③ 見学先の選定

個人差もあるので皆を満足させるのは難しいが、単に時間をかけて見て帰ってきたと言う印象しか残らないこともある。見学の目的、見どころ等を事前説明することにより、興味の度合いもかなり違い、記憶にも残ると思う。

次にホームステイは、ほとんどの招へい青年が感激して帰ってくるが、素晴らしい経験であった。マレーシアに来たからには、郷に入れば郷に従うつもりで臨んだせいも、あまり違和感なく生活できた。それと言うのもいたずら盛りの4人の子育て真最中の所へ、家族の1人として加えてもらい、あるがままの日常生活を体験させてもらったからである。

そしてテメロの多くの方々にも温かく迎えてもらい、突然のスコールにおそわれた川辺のピクニックや趣向を凝らしたパーティーも忘れられない。この数々の出会いを大切にしたいと思う。

また PAMAJA のの方々にも大変お世話になり、こんなに気遣ってもらい申し訳ないと思うほどホスピタリティーにあふれていた。プログラムはメンバーの多大な協力により支えられ、地方に行っても常に十数人の人達がかかわるがわる同行してくれ、来日時の話も聞くことができた。夢中で勉強した日本語学習、楽しかったホームステイや合宿セミナー、興味深かった広島・京都見学、フリーの日にショッピングを楽しみ、デパートのバーゲンでお土産に浴衣を3枚も買ってしまった等、4年前のことを昨日のここのように熱く話してくれた青年がいた。一方、ホストファミリーのことを尋ねても忘れてしまったと言う青年もあり、いかに交流を持続させるのが課題であると思う。私はまず、マレイシア語の勉強をしながら、今回知り合った人達と文通を続けていきたい。

最後に「21世紀のための友情計画」に関係する1人として、マレイシアで得た貴重な体験を踏まえ、お世話いただいたすべての方々に対する感謝の気持ちを、少しでもプログラムに生かしていきたいと思う次第である。

★鈴木 達也

日本では、マレイシアの情報があまりに少なすぎる。行く前は、熱帯雨林・不衛生・イスラム教・ということばかりが頭に入り、不安感がつのるばかりであった。

こと、クアラルンプールに関しては、結構な都会であり、治安も全く心配ない。貧富の差があるのはしかたのないことであるが、誰もが皆非常に優しく、誠実で親切。日本人に対する敵対心は全く感じられなかった。

彼等にとっての人生最大の目的は聖地メッカへ行くことである。そして、そのために働き、家族を大事にする。強い宗教に裏づけられた行き方である。メッカに行ったら、その後、どこへ行きたいかと訪ねると、お金をためて、もう一度日本へ行きたいという。欧米はどうかと訪ねると、行きたくないときっぱり答える。

マレイシアにとって、日本人は親近感を覚え、安心できるらしい。女性は、極めて控え目である。かといって、結婚・出産後も仕事を持たないわけではない。事実 PAMAJA のメンバーの中にもそんな女性がいた。つまり、優秀な人間は、家庭の状況はどうあれ、採用するといった社会のシステムなのである。そういった優秀な人間は、また収入も多く、子供達の世話もメイド等に見てもらうことができるわけである。

我々日本人は、忙しい毎日に追われている。生活の基盤は確かに豊かになった。その結果、あまりに自分の立場や権利を主張して、本来、人間の持つべき他人への思いやりを忘

れがちになり、時として、心にすさまじい風が吹いたりする。そんな日本を離れ、マレイ人の暖さに触れることができ、ホッとした一時を得ることができた。日本を先生として敬意を払うとともに、友達として長くつきあっていきたいという心持ち。時代をになう青年達を国をあげてバック・アップしている政策。中国人との摩擦、インド人との軋轢等数多くの諸問題をかかえながら、複合多民族国家マレイシアは、発展の道を一步づつ着実に歩んでいる。

人々の優しさにまた触れてみたい。そんな心ある国であった。

クアラルンプールは、予想以上の都会であり、車の数も多く、渋滞も多い。地方への道は整備されており、道巾も広い。地方の場合、幹線道路をはずれば、ジャングルの中の泥沼である。車については、数多くの車種があり、高級外車はもとより、日本車も多い。SAGA とよばれる国産車も走っていた。日本車に乗って、日本の歌を聞き、口ずさみながらハンドルを握る。これがマレイシアの若者のトレンドイヤーなのだろうか？。日本と同じく左側を走るの違和感がない。ただし、運転はあらい。ちょっとした小道では、信号を守っている人は少ない。一時停止が必要な部分では、道路が盛り上がり、いやでもスピードを落とすようになっている。

食事をするのに、都会のホテル・レストランはもちろん、田舎のドライブ・イン、レストラン、屋台でもスプーンは用意してあるが、後者の場合、同じく、水・氷も要注意。地方では、手を洗うところも少ないので、濡れティッシュは必需品。どこもそうだが、マレイスタイルのトイレは紙はない。必携のこと。生活水準はかなり高いと思う。マレイシアのすべてを見たわけではなく、しかもマレイ人に限られるわけであるが、各家庭には、電気・水道も完備しており、TVもある。TVは、地区によって内容が若干異なるが、早朝までやっている局もある。町中の街灯もおしゃれな物が多く、ちょうどクリスマスの時期だったせいか、イルミネーションも鮮やか。冷房のきくところは、異常といつていいくらいきいており、上着が必要。

マレー人は、日本人と同じく、お土産・記念品を渡す習慣がある。どこへ行ってもお土産をもらった。たいしたものなくてよいから、多くのお土産を持って行くことをお勧めする。バッチ・絵ハガキ・キーホルダー等小物類で十分。

数多くの人に会い、数多くの名刺を貰った。彼等は、身分証明書（これは国が発行するためほぼ、国民総背番号制になっていると思う。）を携帯しており、名前が長いので、名札を付けている。最初は良いが、途中から名前と顔が一致しなくなってしまう。

物価は安い。1マレイシアドルは約50円。街中には、銀行・両替所も多く、場所によっては、円でも十分通用する。今年は、「Visit Malaysia 1990」という観光年で、外国人旅行者が多い。物価も上がったとのこと。しかし、日本での宣伝は、全くといっていいほど目

にしていない。しいていえば、TVでマレーシア航空のCMが増えたナと思ったくらい。

ほとんどの男性はヒゲを生やしていたが、メガネをかけている人は少なかった。なぜヒゲをはやすのかと再三尋ねたが、誰一人として明確な答えはかえってこなかった。女性は頭に布を巻いている人も多いけど、そうでない人も多い。中国人は全くこだわっていないし、インド人は、また別。ただ、どんな所でもパティック1枚ですんでしまうのは、非常に便利。

滞在中、日本の状況は、全くといっていいほどわからなかった。新聞は、マレー語・中国語・英語が主体で、TVでも日本のことはあまりとりあつかっていなかった。

この時期、日中晴れていれば、むし熱いが、くもりだったら半袖でOK、雨が降ると思つたより涼しい。朝晩は、比較的涼しくしのぎやすい。クーラーのあるところは、半袖だと寒くて震える。

我々は好むと好まざるとにかかわらず、日本からきたかなりレベルの高い代表団になってしまう。その際、アフターケアプログラムを主催している JICA について必ず質問がでてくるし、高度で政治的な要望も出てくる。それに対し、何等かの解答をしなければならぬわけである。場所によってはかなり高度な英語を駆使し、マレー語のみによることもあった。メンバーは、全員すべて語学が堪能なわけではなく、通訳も通訳としての本領を発揮していなかった。言葉による不本意な誤解を生じることなく、相互理解を深めるためには、通訳は、必要不可欠である。

非常にハードなスケジュールであり、一日の睡眠時間も短く、身体は疲れきっていたものの、日本人の忘れてしまった暖かさ、優しさ、誠実さに触れることができ、終わってみれば、実り多き、心の旅であった。

★駒井 俊幸

今回のマレーシア訪問は私にとっては2回目の訪問であった。4年前に家族と1週間過したが、そのほとんどはクアラルンプール周辺であり、街がどの程度変化したか、また、郊外、農村地帯に足を踏み入れ、かつ、ホームステイをすることは、非常に興味があった。

まず最初に驚いたことは、街の建物がきれいになり、高層建築が多く建ったことである。また、3年前には見られなかったサガという三菱との合弁によるマレーシア製の自動車が多く見られ、全体の60%を自国製品でまかなっている。随所で国の活力が感じられた。

マレーシア人は彼等の歴史的経過から、英語をほとんどの人が話すが、われわれ日本人にとっては、まさに外国語であり、かくいう私も、日常会話位しかできないため、この10日間は非常に苦勞した。当初の計画では、表敬訪問、セミナー等では通訳がつくことになっていたが、最初の打ち合わせ会で、PAMAJAの用意した通訳はまったくつかいも

のにならない。クアラルンプールでの市内視察では、行きなり免税店へ連れていかれてしまった。直ちに本来の日程に戻させたが、たんなる観光ガイドと見受けた。このため、通訳なしで全ての日程を消化したが、英語による説明、セミナー等理解の及ばないところもあったことは、団員に本当に申し訳なく思っている。日程が非常にタイトであり、ホテルに帰る時間が連日遅く、加えて、私が風邪をひいて体調をくずしたこともあり、その日のうちに団員とのディスカッションにより、それぞれ補うことができなかったことを反省している。

どこの訪問先でも、招へい事業の評価が高いことは承知して行ったが、実際青年に会うと、表情が生き生きとして、自信に溢れていた。目が輝いているのは、日本の体験が彼等の生活や仕事に良い影響を与えている結果と思われる。

ホームステイ中に農業試験場やゴム園、ヤシ園等の工場を見学できたことは、マレーシア農業の一端にふれ貴重な体験となった。これに野菜や果樹が加われば申し分ない日程となったと思われる。

同窓会のボランティア活動は素晴らしいの一言に尽きる。日本でもこのくらい活動している団体は少ないと思われる。共通の体験を持ったことが彼等をしてこのように結束力を強めている。ただ、現在の事務局長の人柄と力によるところははかり知れない。彼はパソコンに同窓会員の全てを、地区別、派遣年次別、グループ別に入力しいつでも連絡が取れる状態になっている。片道2時間かけて車でクアラルンプールへ毎日のようにでかけ、人事院と相談し、事務処理をしている。彼の任期が終り、事務局長が交替する時に一つの転機が同窓会にくるものと思われる。

今回の体験を、招へい事業のプログラムに活かせるよう努力したい。



夕 イ

平成2年12月12日～12月21日

財団法人 日本友愛青年協会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

	氏名	生年月日	性別	現住所／所属先
チーム・リーダー	三浦厚志	S37. 7.12	男	東京都板橋区板橋 4-31-11 財団法人日本友愛青年協会
メンバー	松田美博	S15. 9. 1	男	秋田県秋田市高陽青柳町 13-12 秋田県農政部農業技術開発課
メンバー	重野好江	S40. 8.24	女	新潟県長岡市宮栄 1-2-12 英会話講師
メンバー	曾根耕嗣	S44. 1.11	男	大阪府寝屋川市香里西之町 20 桃山学院大学 社会学部在学中
メンバー	湊崎和範	S41. 4. 7	男	広島県南区西蟹屋 4-9-11 広島大学 医学部在学中

1-2 調査日程

期間 1990年12月12日(水)～12月21日(金)

12月12日(水)

10:00 事前研修会

14:30 成田空港を出発 JL733便

19:10 ドンムアン空港に到着

(JICA 須田さん, 帰国青年 Mr. SOMYOT ほか2名が出迎え)

21:00 ジェイト・バビリオンHに到着

12月13日(木)

9:30 ホテルを出発

10:00 JICA タイ事務所を訪問

(タイ事務所所長表敬および日程等の打合せ)

11:00 日本大使館を表敬訪問

昼食

14:00 NYB(首相府青年局)を訪問

(青年局長および招へい担当局員との懇談)

17:00 ホテルに戻り, 休憩

19:00 夕食(JICA 岩本さんと打合せ)

12月14日(金)

- 09:20 ホテルを出発
- 10:00 帰国青年との懇談会 (NYB 事務所にて)
- 12:00 昼食 (帰国青年と共に)
- 14:00 ドゥアン・プラティープ財団を表敬訪問
- 17:00 ホテルに戻り、各自市内見学

12月15日(土)

- 10:00~ ホストファミリーとの面会后、各自ステイ先へ
ホームステイプログラム

12月16日(日)

- 各自、ホームステイプログラム
- 17:00頃、各自ホテルに戻る (松田さんは継続してホームステイ)

12月17日(月)

- 各自、バンコク市内見学および自主研修
(三浦、曾根の両名は、サイアム・ユースクラブを表敬訪問)

12月18日(火)

- 05:30 ホテルを出発
- 07:30 ドンムアン空港を出発 TG100 便
- 08:30 チェンマイ空港に到着 (プー君が出迎え)
- 09:30 チェンマイ大学の視察 (芸術学部, 人間工学部, 学生食堂等)
- 12:30 チェンマイプラザホテルに入り, 休憩
- 14:00 昼食 (帰国青年と合流)
- 14:30 ワット・プラタート・ドイ・ステーブ寺院とタイシルク工場などの
見学
- 19:00 夕食 (帰国青年と共に)

12月19日(水)

- 10:00 ホテルを出発
- 10:20 チェンマイ国立博物館の見学
- 11:10 ワット・チェン・マン寺院の見学
- 14:05 チェンマイ空港を出発 TG105 便
- 15:05 ドンムアン空港に到着
- 16:30 ジェイド・バビリオンホテルに入り, 休憩
- 19:00 帰国青年および関係者との懇談会

12月20日(木)

- 09:30 ホテルを出発
- 10:00 チュラロンコーン大学の視察
(政治学部部長を表敬・芸術学部/学年会館などの視察)
- 12:30 昼食(学生食堂にて)
- 14:00 JICA タイ事務所にて事後報告および所長に挨拶
- 16:00 ホテルに戻り帰国準備
- 18:00 ホテルを出発、ドンムアン空港へ
(空港には帰国青年が見送りに来ていた)
- 22:40 タイを出発 JL718 便

12月21日(金)

- 06:05 成田空港に到着
- 09:30 東京駅にて朝食をとった後、解散し家路についた。

1-3 主要面談者

・ JICA タイ事務所

阿部信司 所長

岩本 隆 職員(今回の受入担当)

楊 美麗 通訳

・ 日本大使館

・ 川島孝徳 一等書記官

・ NYB (NATIONAL YOUTH BUREAU 首相府青年局)

Mr. BHAKDI JUTTIJUDATA 事務局長

Ms. MALIWAN KULLAVANIJAYA 青少年対策課課長

他、計8名のJICA招へい事業の担当職員と懇談した。

・ 帰国青年との懇談会

Mr. JIRASAK TRONGKAM 89年 勤労青年グループ

Mr. SATTI APAIROJANA 90年 青年指導者グループ

Mr. SOMCHAI CHAROENAMNUAYSUK 86年 勤労青年グループ

Mr. SOMYOT SAMONTAGOL 89年 農村青年グループ

他、計14名の帰国青年(主にNYB職員)と懇談した。

・ ドゥアン・プラントイーブ財団 (DUANG PRATEEP FOUNDATION)

Ms. PRATEEP UNGSONGTHAM HATA 事務局長

Ms. ARUNEE JAMPATED 国際部長

Mr. DAMRONG BOONYANG 職員 (90年 青年指導者)

・チェンマイにて

Mr. BHU PUAPANSAKUL 90年 学生グループ

Ms. NONGKHRAN PANYA 90年 青年指導者グループ

Mr. SARUNYA SUPARAT 89年 農村青年グループ

・送別懇談会にて

上記のバンコク市内在住の帰国青年および関係者を含めて24名、JICA ティ事務所関係者5名と共に夕食を食べながら懇談した。

・チュラロンコーン大学の視察

政治学部部长

Mr. LERKIAT MAHAVINIJCHAIMONTRI 90年 青年指導者グループ

2. 調査の要約

今回の調査では、主に90年青年指導者グループ、及び89年農村青年グループで来日した青年たちにより多く再会し、自国に戻った後の彼らの生活や社会活動などの状況をみることに、併せて訪タイが初めてのメンバーばかりなので「タイという国」を知ることを主目的とした。そして、今回の経験やタイ国で帰国青年たちとの懇談会などを通して、今後の「招へい事業」へ何らかのフィードバックができるように、各訪問地で各自が問題意識を持って調査を行った。また秋田県の松田さんは、具体的な協力がどのような形でできるか、事前調査の意味合いを含めた訪タイであった。

スケジュール的には、期間中を大きく3つに分け、① 各方面の表敬訪問および青年局等での懇談、② ホームステイおよび自主研修、③ チェンマイ・バンコクにおける大学等の見学および青年交流という流れで行った。

① タイ事務所、日本大使館、NYBの表敬訪問および懇談会ではタイ国についての大まかな知識を、懇談会では帰国青年の日本についての感想や帰国後の活動、青年局の招へい担当の職員の方々を含めて、今後の「招へい事業」に求められることなどを話し合った。

② ホームステイでは各自、事前に得た知識を、実際に体験してみることとなった。それぞれカルチャーショックが多少あったようだが、各家庭で暖かくお世話してもらい大変良い経験をしたようである。自主研修では、帰国青年等が同行してくれたので、文化施設などの見学等、十分な視察ができた。

③ 大学の視察は、チェンマイとバンコクでそれぞれ行ったが、地方都市と首都での学内の雰囲気の違いがあり、特に絵画にはその違い(チェンマイはどちらかというとき色使いが暗く、真理的な内面を表現しており、バンコクでは色使いも明るく題材も他の人を楽し

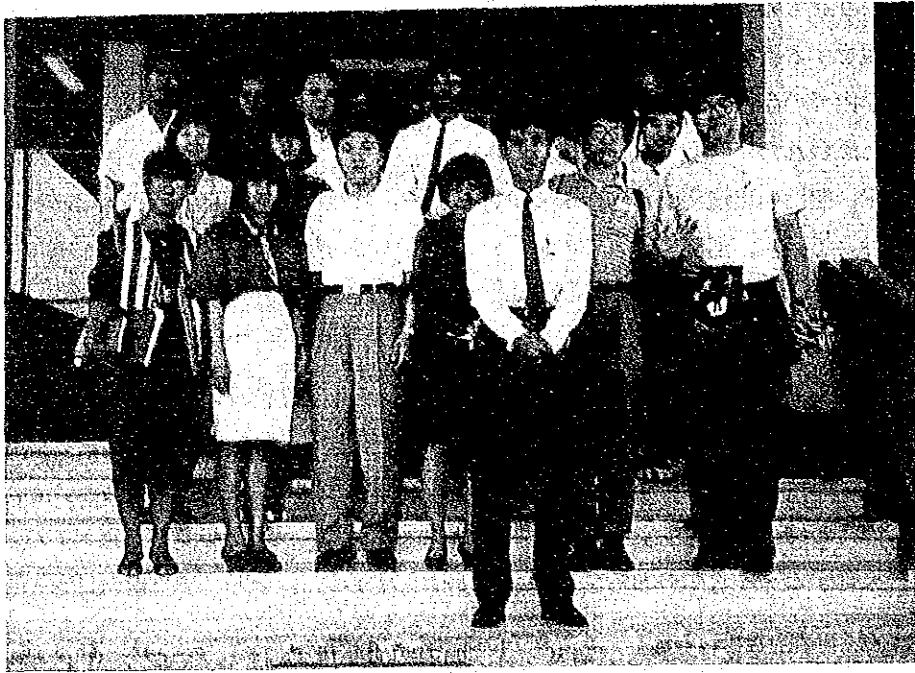
ませるようなものが描かれている)が顕著であることが興味深かった。やはり、都会では自己表現をする機会が多く外向的になるが、地方大学では広いキャンパスであることも手伝って学内での生活がその大半を占めるため、内面の掘下げをすることが多くなるのではないかと思われた。

期間中、空港の出迎えから、ホテルでの滞在中、そして見送りまで、我々が必要とする場面において必ず、帰国青年とその家族などが付き添って、色々とお世話をして頂いた。また JICA タイ事務所の岩本さんも公私にわたって我々のお世話を頂き、メンバー全員大変感謝して帰国した次第である。

ちなみに今回の訪タイでは、90年青年指導者グループの参加者には(その多くがバンコク在住ということもあるが)13名、89年農村青年には(全国に分散して滞在にも関わらず)5名、そしてその他の帰国青年の中核になって活動している方々に会うことができた。このことは「再交流」としては成功したと思われる。今回タイを訪れたメンバーが、新たに来日するタイ青年のお世話を中心になって行うこと、そしてまた新たにタイを訪れるグループを作り、再会することを誓ってタイをあとにした。

その他に付け加えたいことは、①タイにおける日本企業の進出の凄まじさ、例えば、街のそこそこに日本企業の広告の看板が氾濫し、車両の80~90%が日本車である!という状況、バンコク市郊外にも多くの日本企業のプラントがあるという状況である。青年たちに聞いた印象では「別に問題はなく、上手くやっている」とのことであるが、やはり、企業間のヘッドハンティングも頻繁に行われるようになり、人材確保がそれぞれの企業で問題になってきており、また、テレビなどの電化製品や車の所有への要求が所得と生活水準との格差を招き、スラム街の拡大等の社会的な歪みや、最終的には家庭環境の破壊を招いているようである。そして②バンコク市内の大気汚染は思った以上に深刻で、交通渋滞(交通マナーにも問題がありそうだが)としてあらわれる車両の絶対量の多さもその一因ではあろうが、整備不良の市内バス、サムロー(別名:テックテック、三輪タクシー)や自動二輪車などの2サイクルエンジン車の増加による空気汚染は、車が動き出した途端に(すでに6時前から!)始まり、幹線道路では目が痛くなるほどであり、ちょっとした裏道でさえ排気ガスの臭いを感じるほどであった。これらの問題は、日本でも徐々に解決してきたものであり、日本は、今までは「さあ売ろう、やれ買え」式に企業進出をしてきたことと併せて、それこそ「アフターケア」として、一緒に知恵を出し合って解決していかなければならない問題ではなからうかと思った次第である。(文責:三浦)

次にタイを知る上で重要な「農業」に関連した調査を、秋田県の松田さんが行っているの
で、その報告を掲載する。



○ はじめに

タイに関しては、秋田県では89年9月に農村青年グループ25名を受入したが、「秋田県農政部農業技術開発課」が地方での受入窓口となり、県内でのプログラム作成を行い、9月5日～15日（11日間）のお世話を行った。農村青年グループの青年たちは、ホームステイを含めて研修態度が真摯であり、大変評判が良く、各地で大歓迎されていた。このことは、タイ人のパーソナリティーにもよるところがあるだろうが、コーディネーターなど受入側の指導も大きく影響しているものと思われる。また、県内の関係者は、今後もタイの農村青年の受入れを強く希望している。

この招へい事業以外にも、秋田県では、発展途上国などからの短期、長期の研修生の受入を75年度から行っており、農業、医療、鉱業、機械、自動車修理など各分野に渡っている。特に農業分野においては、稲作と果樹（りんご）についての先進的技術を持っており、希望者も多く、農業試験場、果樹試験場などでの受入れは毎年行われている。この他にも、中国農学会との取り決めで、中国全土からの農業技術研修生の受入れを82年度より行っている。今までに80名、現在も10名、来年度の名簿も届いており、滞在費を全額負担して、県立の営農大学校で受入れしているのは、日本では秋田県が唯一のものである。

しかし、受入れをした農家での反応などを比較すると、タイ青年の評判は良く、今後も

何らかの形でタイの青年との協力や援助、そして受入れなどを希望する農家が多いようである。また、受入終了後、ことあるごとに多くの農家の方から、今後タイを訪問するツアーなどを組む予定があれば、必ずメンバーに入れてほしいという相談が数多くあった。農家の方にしてみると、息子や娘（ホームステイした青年たち）に会いたいが、どうしたらよいか、外国旅行に対する不安や、その手続きすら知らない人が多く、私はその先発隊として今回のチームに参加した。

さて、タイを訪問するにあたり、なぜ私がタイに引かれる、また親近感を持つのか考えてみたが、日常生活における共通点がいくつかあることに気づいた。それは、米を主体とした食べ物のバリエーション、例えば赤飯、餅などの加工品、十二支やカレンダー、身体的な類似点が多いことなどである。また、特に秋田独特のしょつつる（塩魚汁：新鮮な魚を塩漬けにして、それから出る汁、魚漿を調味料にしている）と同じようなものが、タイやベトナムなどでも使われていると青年たちが話していたことは、驚きとともに非常に親近感を感じさせる話であった。またそのことが、はじめて訪ねる国に対する私の不安な気持ちを和らげてくれた。

そして、今回の調査に先立ち、私なりにタイ青年からの情報などを基に、タイ青年と協力して行く、秋田県からの技術を主体としたプロジェクトについての方針を立て、①花卉（蘭）のリレー栽培について、②野蚕（天蚕）の飼育についての調査を目的として参加した。

○ タイ王国の概要について

タイ王国がほかの東南アジア諸国に比べ確実に違う点は、それら国が過去、旧植民地というか、他国からの支配を受けていた歴史があったが、タイは一度もなかったことがあげられる。このことが、タイ人の性格形成上大きな要素を占めており、温厚で誇り高いといわれる所以ではなからうか。それに加えて、王室が国民から支持され崇拜されていることが、この国の精神的な安定性に大きく寄与していることも確かである。また政治的にも長期的な「民主化」が進んでおり、従来クーデターなどが政権交替の手段であったが、77年10月以降起っておらず、「民主的」な手段で政権が交替していることは、国家としての安定性を物語ることである。

一方、タイの経済は、もともとは農業を基盤として持ち、農業が果たす役割は無視できない。現在、国民の約70%が農家であり、生産物や輸出品目に占める割合も高く、また農産物の多様化も図られ重要な産業として位置づけられている。しかし、産業構造の工業への移行が、相対的に農産物の輸出品目におけるシェアを低下させ、現在は米に替わって衣料品が第一位を占めている状況ではある。

具体的な数字でみると、国内での生産額における農林水産業は、81年には21.44%のウェイトであったのが、89年では15.14%に低下している。その結果、輸出における農

林水産生産品の割合も 52.14% から 34.10% となっている。けれども、そのウェイトは 30% を維持しており、また工業製品の中には、缶詰や米菓などの農林水産物の加工品も含まれており、今後も重要な外貨獲得品としての位置づけは揺るがないであろう。

○ 農業について

① 土地利用

農地面積は、国土全体の約 40.1% の 2,057 万 ha であり、地目別では、農地の 60% が稲作、23% が畑作、10% が樹園地である。また野菜、花卉、草地は 1% と少ないが、需要が増加しており、徐々に面積は拡大方向にあるとのことである。土地の所有形態は、自作地が全体の 81% を占めるが、東北部では 90%、中央部では 70% であり地域差がある。

② 農家戸数と経営規模

農家戸数は 480 万戸、農家人口 3,400 万人で、総戸数の約 50%、総人口の約 65% が農業に従事しており、長期的にはウェイトは低下すると思われる。経営規模は、単純平均では 4.2ha になるが、1.6ha 未満および 3.2ha 以下の規模が 50% を占める。

農作業における機械化は年々進んでいるが、普及率は 20% 程度と低く、二輪型テイラーが水田の耕運、整地などで約 40 万台程度、大型トラクターは賃貸の形態で、野菜等の高収益農業で 3 万台程度が使用されている。運搬は、ピックアップトラックやディーゼルエンジンを取り付けた簡易トラックが主体になっている。

③ 主要穀物など

米、タピオカ、粗糖、メイズ（タイのとうもろこし）、緑豆が主要な穀物である。

タイ米は、香り米を最良とする長粒種である「うるち米」が 70% を占め、短粒種である「もち米」は少ない（もち米はラオス国境近くで栽培されている）。バンコク周辺の中央部などの灌漑完了地域では二期作が可能であり、ごく一部では三期作も行われている。雨期に行われる一期目は天水（自然水）を利用し、6月に播種と移植が行われ、乾季初期の 11月に収穫される（粳で 1,600 万～1,800 万 t の生産量）。二期目は灌漑用水を使い、2月に始まり 5月に収穫される（粳で 150 万～200 万 t の生産量）。国内消費量は 1人当たり 140～150 kg とほぼ日本の 2 倍である。なお米は 100 kg の麻袋詰めで流通している。輸出量（碎米を含む）は年によって違いがあるが 350 万～460 万 t となっており、米の生産国では第 1 位の輸出量となっている。

タピオカおよびキャッサバは、やせ地での粗放栽培が可能なこと、加工が簡単なこと、EC の巨大マーケットからの引き合いが多く、1,800 万～2,000 万 t が生産されている。その内、30 万 t が国内で食用として消費され、650 万 t がベレット（飼料用ほか）に 65 万 t が粉に加工され、ベレットの 90% が EC、粉の 50% が日本や台湾、アメリカを中心に輸出されている。特記すべきことは、タイと EC との間で年間 550 万 t の枠が決められ

ているが、EC市場においてタイ産ペレットの需要が高く、それ以上の輸出が行われているということである。

砂糖きびは、主に粗糖や白糖、糖蜜の原料として生産されている（ビートは栽培されていない）。価格は国際価格に大きく左右されるため、農民保護のため政策による価格保護が行われることもある。栽培面積は50万～60万haで、2,400万～3,000万tの生産がある。

メイズは、年間500万tの生産量があり、実に世界の1%を生産していることになる。これは50年代の10倍にあたり、国内の養鶏（ブロイラー）への飼料の需要増加と、生産量の60～80%が輸出されていることが、その増加の理由である。しかし一方では、メイズ特有の「アフラトキシン（カビ毒）」が問題になっており、輸入国である日本側等での調査や技術協力で、原因究明と防除対策がこじられているが、タイ国内での努力も必要となっている。

緑豆は、マングビーン（緑豆）とブラックマッペ（黒豆）の2種類があり、30万～35万tが生産され、マングビーンは国内で「はるさめ」のような麺やもやしの原料になり、ブラックマッペは主に日本に輸入され、食用もやしに用いられている。

④ 果物、野菜

タイの果物は種類が多く、主要なものは25種類あり、それぞれ地域性はあるものの、ほぼ全国的に栽培されている。年間全体で300万tの生産量があるが、多くは国内で生鮮として消費されている。また、野菜も種類が豊富で、主要27品目で213万tの生産量があるが、これもほとんど国内で消費されている。

輸出に関しては、日本などでは害虫等の関係上、加工品しか輸入許可されていない。例えば塩漬けのしょうが、缶詰のベビーコーン（ヤングコーン）、冷凍アスパラガスなど。また近年は蒸熱処理されたマンゴーが解禁になったが、タイ政府も品目の拡大を求めているということである。

○ プロジェクトの可能性について

① 花卉のリレー栽培

近年、日本の花卉市場には、世界中から珍しい種類や時季的なものが数多く輸入されており、その中でもタイからの蘭が定着してきている。これは、日本人の嗜好が自然なものへの要求が高くなったことと共に、タイの栽培農家の努力によるものであるが、残念ながらタイから輸入される花卉は単価の低いものが多く、カトレアなどの大輪で単価の高いものはあまり輸入されていない。これは現在のところ、日本では、植物防疫上「切り花」での輸入しか許可されていないためである。また、切り花では、鮮度の保持は難しく、高級品種の輸入にはリスクが大きすぎるからである。

しかしタイでは、蘭を栽培するための条件が揃っており、自然栽培に近い状態で作るため、低コストで栽培することができる。ちなみに、花を咲かせるためには、日本で3年以上かかるのがタイでは2年半、またコスト的には1鉢300バーツぐらい(約1,650円、日本の中部以北で栽培すれば、冬の暖房費などのために、その10倍はかかる)で作ることができるのである。だから、タイで「株」を栽培し、つぼみのままで輸出し花を輸出先の日本で咲かせるような方法(リレー栽培)をとれば、単価の高いカトレアなどの流通が可能となり、タイと日本の農家双方で利益を上げることができると思われる。現地の農家数戸と検討してみたが、意欲は高いようで、リレー栽培の可能性は大きい。

② 野蚕(天然蚕)の飼育について

タイは、昔から世界的に「タイシルク」が知られ、シルクの生産が伝統的な主要産業として、その地位を占めており、品質の善し悪しもあるが、生産量は大変多い。しかし今回の調査で、総合的にみて、その品質は日本のシルクとは比べられない程、低いレベルのものであることが解かった。だから、養蚕をするための土壌があり、そこで消費者の満足いく製品、品質の高い製品を作ることができれば、まだまだ成長が期待できる産業と思われた。現在の日本国内での消費傾向としては、価格よりも、その品質やオリジナリティのあるものへの嗜好が強く、特に天然蚕のもたらす淡いグリーン色のシルクへの人気が集中している。もし、タイでその需要を満たすだけのシルクを生産できれば、単位あたりの利潤も増やすことが可能であろう。そこで、タイへの技術移転の方法を現地で探ってみた。まず一番の問題が、品質に直結する蚕の食べる樹木について、より品質の良いシルクを生産するための品種がタイに生息しているか、あるいは日本の品種の移植が可能かということである。今回の短い滞在中には確実なものは確認できなかったが、Houkyhという樹木があり、それがカシヤナラなどの品種に類似するものであり、それについて研究することから始めるのが確実のようである。(文責：松田)

3. 現地活動報告

3-1 表敬・訪問先における意見交換内容

・JICAタイ事務所(12月13日)

タイ事務所は、阿部所長を含め14名の日本人スタッフ、タイ人職員が10名前後、および通訳や運転手などの一時採用者が10名程度で35名程の規模で運営されている。所在地は、日本大使館の東側に隣接しており、3階建ての綺麗な建物であった。岩本さんの説明では「テロなどの危険防止のため、大きな表札みたいなものは出していない。日本大使館も同様である。現地の人でも何の建物が知っている人は少ないかもしれない」とのことである。

主な業務としては、① 技術開発や研究調査および資金協力、② 協力隊隊員の配置お

よびそのフォロー、③ 研究員（技術員や行政官等）の日本受入れや技術研修、および④ 青年招へい事業の実施など、タイにおける海外協力の最前線基地として、その業務は多岐にわたっている。また89年度の経済協力総額（ODA）が、996.46億円（仮集計）で、タイの受け取る二国間ODAの7割が、日本からの援助であるとのことで、タイ事務所の方々には、小人数で大変だと思いが頑張ってもらいたいと思った次第である。

以上のような内容のタイ事務所の業務の説明を、阿部所長から受けた後、「青年招へい事業」におけるNYB（首相府青年局）との協力体制とその問題点も含めて説明を受け、今回の調査が有意義なものになるようにとの励ましのことばを頂いた。

その後、スケジュールや事務所での手配についての説明を受け、期間中主要なところに通訳としてついでに楊美麗（マリー）さんを紹介して頂き、日本大使館に向かった。

・日本大使館（12月13日）

川島孝徳一等書記官に訪タイの挨拶をすると共に、タイにおける社会状況等についての説明を受けた。次に次の3点について話しを聞いた。

まず社会問題として今、一番注目されているのがAIDSであり、現在潜在的な数字を含めて、国民の1%が感染しているのではないかとされているそうである。感染経路としては、麻薬の使用と性的感染が主で、特にタイ北部の地方（麻薬の原産地）やバンコクにおいて、麻薬使用時の注射器の回し注射、無分別な性的な接触によって広まっているそうである。滞在中は危ないことは慎んだほうがよろしいのでは？という示唆も頂いた。

また労働関係では、平均月収が約4,000バーツ（日本円：約22,000円）であり、法律で決められている最低月給は、約2,250B（日給：90B×25日）で、専門職（大卒者）の初任給は、8,000B～（約44,000円）であり、日本の大卒者と比べると約1/4ぐらいの感じである。しかしこれはバンコクにおける給与体系であり、地方では、その2/3ぐらいか、それ以下の水準になるようである。ただし滞在中感じたことだが、物価は押し並べて日本に比べて、同じく1/4ぐらいであり、果物などの生鮮食料品などはより安く、生活上の苦しさはあまりないのではないだろうかという印象である。それにもまして「微笑みの国」といわれるだけあり、人間性は大らかで、ギスギスしたところがない分、日本より精神的な面を含めて、ゆとりのある裕福な国と思われた。

教育に関しては、義務教育は小学校6年間で、統計上は95%近い就学率であるが、義務教育といっても授業料（文房具を含めて）が半年で3,000B程かかり、またその他に通学するための経費を含めると全部で、子供1人に月1,000B近い費用が必要なため、小学校を出ていない子供の割合はもっと増えるであろうとのことである。また、大学も国立16校、私立25校（89年現在）であり、約7.7%が通学しており、日本でいうところの中学校や高校はそれぞれ35%、25%という水準であるそうである。親の経費的な負担

や労働体系、校舎の建設などを含めた学校運営の問題など、今後も教育については改善の余地があるようである。

・首相府青年局 (NYB、12月13日)

青年局の所在地は、サイヤムスクエアの北側、バヤータイ通りを鉄道線をわたり、すぐの道を右折して少し行ったところの右側にある3階建ての建物であった。

当日は忙しい会議の間をぬってバックデイ局長(89年より局長に就任)が出席し、勞いの言葉とともに、今後も青年招へい事業に期待をしている旨の話しがあり、私たちも今回の訪タイを含め、協力して招へい事業の充実を図りたいという挨拶を行った。局長退席後、まず最初にNYBの諸活動についてのスライドを見て、マリワン青少年対策課課長以下7名の青年招へい事業の実務担当者の方々と懇談を行った。

まず秋田県の松田さんからタイ青年を受入れしたときの感想から「タイの青年は、純真で家族思いであり、ホストファミリーからも大歓迎を受け、今でも日本のファミリーは我が子のように思っている」という話しをした。タイ側からは、青年が日本滞在中の問題点を上げて欲しいということだったので、入浴について、特に女性が恥ずかしがって大浴場などの施設を使うとき、電気を消して入ったり、一人づつ使って順番待ちをしている様子などのハプニングを話し和やかな雰囲気のもと、話しが弾んだ。また、青年の住所の表記が、「県・市」などについて統一性が取れていなかったりするなど、事後交流の大切なものなので、参加青年に徹底してほしい旨の提言をした。しかし名前の表記の仕方を含めて、タイ語からローマ字への変換に「標準の方式」というものがないため難しいが、今後努力してみたいということであった。また日本国内での招へい事業実施の形態(JICAと青少年団体との関係)などの説明なども行った。

・ドゥアン・プラディーブ財団(12月13日)

財団の事務所はバンコク市の南東部、ラマ4世通りと高速道の交差したところの南側のクロントイ地区にある。この地域はチャオプラヤ川が迂回するところで、湿気が多く居住にはあまり適さない地域ではあるが、クロントイ港での労働者の流入のために、自然発生的にスラム街(廃材やトタンなどを使った1軒の大きさが、間口が3~4軒、奥行き5~6軒ぐらいの長屋のような建物が乱立している。条件の良いところは上水道があるようだが、排水はたれ流し...)を呈した居住地になったそうである。バンコクでは、この地域が一番大きなスラムであるそうだが、バンコク市内には1,500ヶ所以上のスラムが点在しているそうである。

当日は、アルニイ国際部長さんに財団の活動などを中心に説明して頂き、新しい幼稚園と事務所の回りを見学させて頂いた。財団の主な活動は、88年度のアフターケア調査チーム報告書のほうに載っているのでここでは省かせて頂き、説明を聞いて印象に残ったこと

を報告したい。また、メンバーはそれぞれにカメラを持っていたが、居住地や住民にレンズを向けることは皆できなくて、自分の脳裏に記憶したことを付け加えたい。



まずスラムの形式についてだが、急激なバンコク市の経済的な発展が、労働力を必要とし、またバンコクと地方の経済格差のため、始めは地方在住の男性だけがバンコクに移り住んできていたが、家族での流入が進み市内のあちこちの空き地に家を建てて住むようになった。バンコク市内の移動中にも、近代的な建物のすぐ脇に掘っ立て小屋のような建物を見掛けることが多々あり、ホテルの窓から見える範囲にも建っていた。最近、バンコク市内の土地の値上りは激しく、立ち退きの問題も出てきており、不審火などによる追い出しなどの事件も起きているそうである。またバンコク市はチャオプラヤ川の下流であり湿気が多く、ちょっとした低地やビルの基礎工事などで掘ったところなどには水が溜まっている（乾季に入ってから3ヶ月すぎている12月中旬でさえ！）状況であり、居住地として認知されていないところは、上下水道の整備など期待できるわけではなく、悪臭の漂う中での生活を強いられている。「嫌ならバンコクに出てくるな！」と考える人もいるかもしれないが、急速な経済体系の「農業から工業・商業への移行」は、もう戻ることのできない所まできており、今さら地方に帰ることはできない。

次に、社会的な環境についてだが、居住地としての認知を受けていないところに住んでいるため、公的な保護（戸籍などの公的な認知等）を受けることは期待できない。教育についても、親が出生届けを出さない（出せない）で子供を労働力として見ており、物心つくと家庭内での仕事や日雇い労働に就かせたりしているそうである。プラティーブ財団では幼稚園や小学校をつくり、子供たちの教育に力を入れているが、まずは親の教育から始めなければならない状況だということである。麻薬などの使用も、公然と行われているようで、AIDSの感染率も他の地域より大変高いそうである。また、月給制の仕事に就くことが困難なため、日本でいうところの「手配師」の斡旋による仕事にしか就くことが出来ず、中間搾取された賃金（1日80B程度）しか手にできない状況である。

また、アルニイさんに教育について特に突っ込んで質問をしてみると、①タイでの小学校は義務教育ではあるが、月額1,000B程の費用がかかること、②親が子供に教育を受けさせるという意志があまりなく、また労働力として考えていること、③そもそも学校そのものの絶対数が少なく、その上、雨期などでは学校までの交通機関や道路が使えないことがあり、学校へ行くことへの意欲がなくなる子供も多いということが、それぞれ影響し合い就学率が低くなっているそうである。スラムの子供たちは出生届けがされないことが多いため、政府などの統計の分母には表れてこないのが、実質の就学率のパーセントはもっと低いだろうとのことである。

他方、日本には「非差別部落」と呼ばれる居住地が江戸時代の政策により存在し、差別が行われていた（いる？）歴史があるが、タイのスラムは最近になって急速に増えてきたこと、日本のような政策意図があったわけではないため、表立った居住地による差別はないそうであるが、安定した職業についていないこと、最近のAIDSの蔓延などのため、社会的認知において低い評価を受けていることは事実のようである。

しかし現在は、プラティーブ財団の活動などにより、社会的な保護を受けることができるようになってきており、財団が作った小学校も公立化されるなど、徐々に社会環境は良くなってきている。また地域に住む青年の指導者も育っており、ボランティアで協力する人々が出てきているそうである。ダムロン君（90年・青年指導者グループ）も、その一人で我々が訪ねたとき同行してくれたが、日本に来たことが彼にとって大きな自信となりより積極的に行動するようになったそうで、財団にとっても良い指導者となりつつあるそうである。今後もそんな人材養成的な役割を招へい事業は持っているのかもしれない。

また、プラティーブさんのご主人も日本人であるように日本からの人的、金銭的な協力も多いようで、クロントイ通信『ターンナムジャイ（心の和）』というニュース・レターも90年7月から発行されており、「教育里親制度」などには個人でも協力でき、これからも益々の日本からの援助を期待しているそうである。

最後に、出張から帰ってきたばかりで廊下で立ち話しかできなかったが、プラティープさんの澄んで奥深く強い意志を感じる目や、ダムロン君の純粋な瞳をみていると、ボランティア活動の何たるかをもう一度考えさせられる思いがした。

3-2 帰国青年同窓会等の活動状況

・帰国青年との懇談会にて (12月14日)

14日の懇談には、帰国青年14名が集まったが、残念なことにその内13名がNYBの職員(来日したときの団長・副団長クラス)であり、どちらかという、招へい事業に対し主催者サイドの人間との話し合いとなってしまったことが残念であった。

まず最初に報告したいことは、タイでもやっと同窓会組織ができ、91年から動き出すということを開けたことである。名称は「FRIENDSHIP YOUTH ALUMNI-ASSOCIATION OF THAILAND」と言うことで、現在のところNYBの建物の中の一室を使って名簿整理などの業務およびイベントの企画などをする予定であることを、世話役のソムチャイさん(86年・勤労青年グループ)から報告を得た。経費などについても、政府からの予算取りに目処がついているようである。また他のASEAN諸国との横の繋がりについては、91年はシンガポールで、92年にはタイで同窓会の会合が予定されており、タイ開催へ向けての準備も始められているようである。

また3年後ぐらいを目処に、宿泊施設のある会館の建設についても計画があるそうで、出来上がれば、日本のホストファミリーや交流プログラムで会った方々との再交流するための施設として利用したいとのことである。

ただし不安に思えたことは、今回の懇談会に集まったメンバーがNYBの職員だけといってよい状況(職員以外の1名、ラキアット君は90年・青年指導者グループで来日し、20日のチュラロコーン大学の視察に同行)であることなどから、この新しい組織が、同窓生の主体的な運営に任されるのではなく、NYB職員ベースでその活動内容が決められ、その実施も一般の同窓生の参加がみられないということにならないかということである。単なるNYBの下部団体としてNYB職員のためのもの?というのではなく、今までの、そしてこれから日本に来るであろう青年たちのオアシス的なものになっていくことを期待したい。

なお、それぞれのグループによって横の繋がりには強い弱いがあるようだが、90年・青年指導者グループの参加者は、個人的には連絡を取り合ったり、情報交換をしているようである。今回も訪問先に帰国青年が会いに来てくれたり、どこそこに行けば誰それに会えるから…と教えてくれたりした。ただし、そんな中にもNYBの職員で参加した人との溝があるようで、一般参加の青年に話しを聞いても、その逆でも、お互いのことで聞いて欲しくないような顔をする場面に出くわすこともあり、気掛かりであった。

しかし、この同窓会が、アフターケアチームの受入れ、日本のホストファミリーや交流青年などから組織される訪タイグループの受入れなど、これから考えられる再交流のタイ側の受入窓口としての役割を担ってくれば、より緊密な交流ができるのではないだろうか。そしてまた、今後来日するタイ青年への事前研修などで積極的に情報提供できるシステムができれば、より良く、より深い体験を来日する青年たちができると思われるので、今後の活動に期待したい。

3-3 セミナー・交流会実施状況

セミナー形式のプログラムは、特に設定しなかったため、以下には交流会についての報告を記載する。

・帰国青年との懇談会にて（12月14日）

内容が重複するので、ここでは、3-2. 同窓会等の活動状況、5. 招へい事業への評価で記載しなかったことについて述べる。

懇談会では、タイに来てからの第一印象について質問されたので、メンバーそれぞれに答えたが、「暑い」「食べ物が辛い」「排気ガスが凄い」の3つが全員の一致した感想であった。「暑い」については、日本人の「暑い」という範疇は、28度を越えたあたりからすべてが「暑い」であるが、話しの中でタイの青年から「今の時期は温度の差が激しく、今日は寒いほうであり、風をひきそう」ということを聞いたときには、我々メンバーは顔を見合わせるしかなかった。また「辛い」については、前日JICAの岩本さんとタイ料理を食べに行き、茂野さんがスープを飲んでいたときに香辛料を嚙んでしまい、大変苦勞したことを話すと、同情の声とともに笑い声が聞こえていた。そして「排気ガス」については、日本では長いサイクルで「排ガス規制」などを行い少しずつ解決してきたことなどを話した。和やかな雰囲気では進んでいたが、タイの青年たちは向上心が旺盛であり、何か今後に役立つのではないかとと思われることについては、真剣な眼差しを投げ掛けていた。

NYBの会議室でその他にも招へい事業についての意見などを聞いたあと、場所を変えて昼食は近くのレストランで一緒にとり（経費はNYBが負担してくれた）、それぞれ日本についての印象を話したり、タイについての情報を仕入れたりした。

・帰国青年および関係者との送別会（12月20日）

20日の送別会はJICAタイ事務所が主催で、タイ事務所より5名、帰国青年ほか関係者24名で、ランドマークホテルの「水仙楼」という中華料理店で行った。特に堅苦しい挨拶もなく定席だったので、テーブル3つにそれぞれ90年・青年指導者グループ、89年農村青年グループ、JICAおよびNYB幹部というような色分けで座り、日本での体験、タイについてのその後の感想などを話したり、写真を撮ったりして楽しい一時を過ごした。



3-4 ホームステイ実施状況 (12月15日～16日 1泊2日)

ホームステイはNYBがセットして下さった。ステイ先については、松田さんだけは、希望もあり2泊(15日を89年・農村青年グループで来日したソムヤットさん宅、16日は同じくチャチャワンさん宅に)したが、他の4名は90年・青年指導者グループで来日した青年宅に、それぞれ1泊づつしてタイ人の生活に触れることとなった。ただし、残念だったのは、曾根君と湊崎君が同じ青年に世話になったこと、しかもパタヤビーチにある島の青年の父親の経営するホテルに泊まることになり、ホームビジットはしたが、ホームステイではなかったことである。

○三浦 厚志

Mr. Polrak PATCHAKHAPATI 33歳 (奥さん、奥さんの両親、義弟、メイドさん)

(ボンラック/総理府)

20/5 Soi Wat Sangvej, Sampraya, Phranakhon, Bangkok 10200

TEL. 281-8888

○茂野 好江

Mr. Saüt APAIROJANA 36歳 (奥さん、娘2人)

(サーティッツ/総理府青少年局)

115 / 3 Suanpak Rd., Chimpli, Talingchan, Bangkok 10170

TEL. (Off.) 251 - 4272

○曾根 耕嗣 / 湊崎 和範

Miss. Nawarat KINGJONGJAROENSUK 24 歳 (両親, 兄, 姉)

(ナワラット / 学生・商学科)

62 - 64 Soi Sa - nguansin, Ramkhamhaeng 24, Huamark, Bangkok,
Bangkok

TEL. 318 - 2889, 314 - 0285

○松田 美博

15 日

Mr. Somyot SAMONTAGOL 38 歳 (奥さん, 娘 1 人)

(ソムヤット / 首相府青年局研修課長)

32 / 54 Soi Tubtim, Kroongdhepnon Rd., Muang, Nondhaburi

TEL. (Off.) 252 - 8178

16 日

Mr. Chachawan KATEKAEW 25 歳 (祖父, 祖母, 両親, 兄弟とその家族。全員で 12 名)

(チャチャワン / 農業)

1 Moo 5 Tambon Nongnuk, Khaiamphur Katumban, Samutsakhom

TEL. 01 - 331 - 0163

3 - 5 その他

今回の訪タイでは、タイという国が「バンコク」と「地方」というまったく違った側面を持っていることを目の当たりにした。総人口約 5,500 万人の内、その 1 / 10 の約 580 万が住む「バンコク (その内の 1 / 5 がスラムに住んでいる?)」という巨大都市、そして各地に点在する地方都市 (一番大きなものでも 20 万人規模に満たない) を含めた「地方」。「バンコク」はアジアを代表する国際都市としての側面を持ち、また人間を含め「富」が集中しており、都市の持つ色々な良い面、悪い面、歪みを持ち合わせていることも事実である。また「地方」は総人口の 7 割近くが農業に従事していることから推測すると、ほとんどの人間が農産物の生産に関わっていることになる。しかし農産物の生産高を飛躍的に伸ばすことは難しく、また農産物がバンコクで消費されるか、そこから国外へ輸出されるということは、それが流通する「バンコク」の富を増やし、結局はそのことが物価の上昇を招き、地方在住者の実質的な所得の低下を招いている。そのことにより「バンコク」への人口集中が加速されていることは、必然なのかもしれない。日本でも、「東京と地方」という色分けがされることはあるが、その違いはタイと比べ

ると緩やかであり、我々にとって「バンコクと地方との格差」は驚きであった。

この違いを実際に感じたのは、バンコク市街から車で1時間ぐらい走ると、そこには田畑なのか単なる湿地なのかわからない平原が広がり、道路は水路を渡るとき上下するだけで、ただひたすら真っ直ぐに延びていく。四方には地平線が広がり鉤路湿原を何十倍にも広げたような空間、山岳など見えず一つの山すら見ることの出来ない真っ平な中を荷物を積んだトラックやバスが高速度で走り、点在するバス停でバス待ちをする人々に砂煙を掻けている。「バンコク」の喧騒が夢物語であったかのようなのである。

また農場を見せてもらったとき、そこで働く人々の家はヤシの葉の屋根、竹で作った壁、家具と言えるものは簡単なトイレの設備、プロパンガスにコンロと鍋、ベットぐらいであり、タンスすらなかった。これは自営ではなく「小作人」として働いている人の家であるからということだが、その質素さには驚かされた。その他にもモルタル塗りの家もあったが、それは農作業以外の仕事をしている人の家だということ。また、農地の真ん中に御殿のような家も建っており、それは地主の家であるとのことである。土地の所有者かどうかによっても、雲泥の差がある。しかし、その心の奥底は分からないが、畑で働く人と土地の所有者の間に、憎悪というような感情は存在しないようで、その状況をそのままお互いに受け入れているように見えたのは、私の錯覚であろうか。そして感覚的に、いつまでもこの空間がそのまま漂っており、どこまでも続いているように感じた。道路を走る車以外の文明的なものをそこに見つけるのも難しい。そして、今回訪ねたチェンマイも小さいと言えない街ではあったが、やはりバンコクと比べると、まだまだ地方の商業都市あるいは観光地であり、10分ぐらい車で走れば中心街から外れ、高原野菜などを作る畑が広がっている。チョンブリ市やノンタブリ市の市街を通過したこともあったが、家がかたまっ建てている中に若干の商店街があるぐらいで、日本のちょっとした地方都市よりも、その規模は小さく、そして人の流れは少なく感じた。

一方では、買取りの公営住宅ということだが、1階が何らかの販売店を営んでいる2階建てのアパートが、道路沿いに突然、建っていたりする。そこで生活している人は、バンコクや郊外の工場で働いているそうだが、その建物以外には何もないところに点在している。道路の整備とともに、着実に「バンコク」が地方にも進出してきている。バス停に佇む人々はそれらの家に住み「バンコクの地方への進出」に手を貸しているのだ。

以上のように、タイは「バンコクという巨大な経済都市」「地方～農村」の2つの全く違った顔をもつ国であるというイメージが私たちには残った。

もう一つ私たちの印象に残ったのが、子供たちの動向である。タイの青年に、シーロム通り（感じとしては、新宿の歌舞伎町に原宿と上野アメ横を混ぜたようなところ）を案内して頂きディスコなどに連れていってもらったが、有名なブランドの偽物のTシャツ

ツヤ時計、貴金属やタイシルクを売っている露店の中で小学生ぐらいの子が店番をしていたり、ディスコの中に制服を来た女子中学生などが踊っていたりするのを見掛けたことがある。この通りは、風俗営業の店が軒を連ねており、道路の脇にはどう見ても麻薬をやっているような目をした若者がたむろしているところで、しかもすでに12時を回っている時間（こんな時間まで遊んでいる我々も我々であるが…）に関わらずである。帰国青年にそのことを聞くと「ディスコには11才から入れることになっている。だから中、高校生の頃、卒業式や学園祭などのあとに皆んなで出掛けることもあった。だけど多分、そのときいた子たちは、SEXの相手を求めて来ていたのかも知れない…」と言って顔をしかめていた。

その他にも、交差点のところで信号待ちをする車の間を子供たちが新聞や首飾りを売っていたり、観光地では、小銭を貰いに観光客を追い掛けたりする子供も見掛けることがあった。

子供は学校に行ってお勉強しているのが正しい在り方というのは、経済的に裕福な日本人の持つ「常識」なのかもしれないが、それにしても、日本の子供たちは幸せなのかもしれないと思える出来事であった。

4. 訪問国における青少年団体の活動状況

今回の調査では、青少年団体の活動現場の視察というようなスケジュールを組まなかったため、ここでは、NYBの活動および大学での学生の活動などについて記載したい。日本を出発する前の予定では、17日の自主研修時に本協会の有効団体のサイアム・ユースクラブ（SYC、ピンヨー・ブンヤラタファーン会長、前バンコク市議会副議長）の方に、バンコク・ユースセンターを視察させて頂くつもりでいたが、月曜日が休館日のため中止になってしまった。

NYBでは、青少年の育成のため各方面の協力を得て、スポーツ大会や民族楽器の演奏会の開催を行っているそうである。また経費面では企業などから協賛を受けており、中には副賞として、アメリカや日本への研修旅行のつくものもあり、参加希望者も多数あるそうである。

チャンマイ大学では、プー君（90年・学生グループ）に学内を案内してもらい見学を行った。ちょうど我々が訪ねたとき「日本まつり」を行っており、芸術学部の校舎の前には、たなばたの笹かざりとお神輿を足したようなものが飾ってあった。それには、ノートやエンピツ、コインなどが結び付けられており、それを恵まれない子供たちに送る予定であるそうである。我々も5円玉やプレゼントとして持っていったものを結び付けて、参加させてもらった。その他にも、日本についての展示もあり、別の日には日本文化を紹介す

る日本舞踊などの発表会も予定されているようで、それらの企画は学生たちが立てて、運営していることであった。

次に、チュラロンコーン大学の視察では、ラキアット君（90年・青年指導者グループ）の案内で学生会館などを見学した。クラブ活動は、教授などに担当教員になってもらい、活動についての申請書を大学に提出し受理されれば、部室が与えられるというシステムになっているそうである。スポーツ系や民族芸術系のクラブが多いが、ボランティア活動を行っているクラブもあるそうである。学生会館は日本のものと同じで、若干薄汚れたところもあったが、日本のように1つの部屋に3～4つのサークルが雑居するようなことはなく、整然としていた。

タイでは、公に青少年団体をつくることは大変難しいことであり、特にボランティア的な活動を行うことは、どうしても政治批判的な側面を持たざるを得ないので、いきおきスポーツ系や芸術系や専門分野の研究系の団体が多くなるそうであった。

なお、大学の視察中、そこここで学生たちが本を読んだり、レポートなどを書いている姿を見掛けた。また学生食堂でも、何か論戦のようなことをやっている姿もあった。大学の絶対数が少なく、学生もエリートを自認しており、大学は基本的に学問をすることであるので、当然といえば当然であるが、自分の学生時代を振り返ると恥ずかしさを感じた。

5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価

90年・青年指導者グループの関係者に聞くと、日本に行ったことが本人にとって大きな自信になり、帰国後の行動に積極性が出てきたということをよく聞いた。また、日本にいたときは緊張していたことも手伝って少し内気な感じがした青年が、タイにおいては、始終にこやかでとても明るく、イメージが変わってしまった人もいた。その後も、日本の青年やホストファミリーと、手紙のやり取りをしている人もおり、総体的には、評価はいたってポジティブなものが多く、国際交流としては満足のいくものになっているようである。

14日の帰国青年との懇談会では、参加者に一人ずつ、招へい事業への今後の期待を聞いてみた。文化財などの見学や交流プログラムについては、現在のボリュームで良いとのことであるが、全体的にはもう少しスケジュールに余裕を持たせて欲しいという意見とともに、研修的なプログラムとして、青少年活動の現場への参加、企業などのマネジメントや品質管理、マーケティングについての研修なども行っても良いのではないかということである。特にタイにおける販売戦略のノウハウに対する要求は高いようで、そういう研修に対する要望があった。しかし、交流プログラムを中心に考えている招へい事業にはすぐわない面もあり、1ヶ月の期間では、それだけを重点的にやってもとてもこなし切れない内容だと思われたが、通訳の方の語学力の問題もあり、その場は聞くだけに留めた。

6. 調査チーム参加者の感想

○ 三浦 厚志



この報告書の中に私の感想があちこちで顔を出しているのですが、ここでは、重複しないようにホームステイ中のことや物価などについて記述してみたい。

私がホームステイしたのは、ボンラックさんの家で、民主記念塔から北西へ500mぐらい行ったところの路地を入り運河を渡ったチャオブラヤ川沿いにあった（川沿いにあったことは16日の朝、家の回りをうろついたときに分かったことであるが…）。家族は、本人には直接は聞いていないが、どうもボンラックさんは婿養子のように、奥さんのスッパラニーさんの両親と弟さんとの5人、そしてメイドさん1人と犬1匹（この犬は最初、私に向かって檻の中で吠えていたが、出されて私の臭いを嗅いで安心したのか、そこらへんを静かにウロウロしていた）と生活していた。

たまたま私が泊まらせて頂いた日は、お父さんの断食日であったため、その日は家族と一緒に食事をとったが、ずっと何も食べないでいて、何だか悪い気がしたが、タイの仏教徒の宗教心に驚かされた。私など「宗教は何か」と聞かれたときは「仏教です」と応えることにしているが、そんな「にわか仏教徒」には到底、真似のできないことであった。ま

た国王に対する尊敬の念は国を上げてのものようで、街のあちこちに国王の肖像画が掲げてあり、ボンラックさんの家にも写真が飾られていた。

カルチャーショックという面では、食べ物ということもあるが、やはりトイレである。トイレは「朝顔型」と言われるもので、使い方は和式のものとは大差はなく、跨いでコトを致すのである。違いは便器の足置きの位置が高いこと、横に大きな瓶と杓になる鍋の取っ手のないヤツが浮いていることぐらいである。しかし一番の問題は紙がないことである。小さい方は水を流せば済むが、大きい方がテクニックと勇気がいった。エイヤツとばかり水を流しながら、左手でオシリを洗い清めるのである。そして、便器の瀬を使って汚物を流し落す方法を見付け出すまでには、少々研究する時間が必要だった。これどこの方法のほうが資源のためにも、健康のためにも良いのではないかと考えたのは、私だけではないだろう。某ウォシュレットを使用している方には、ご理解頂けることと思う。

もう一つあげるとすれば、警官のもの分かり？の良さである。16日にバタヤにつれていってもらったが、行きと帰りと1回づつ警官に呼び止められた。何が起きたのか分からない私は、バタヤに生きたいなどと言わなければ、こんなことにならなかったと後悔しながら、小さくなって様子を見てみると、警官は免許証を見ながら青色キップを切るような顔をして腰のあたりで100Bを受け取っている。その後は、お互いにニヤニヤしながらボンラックさんは車に戻ってきた。ことの次第を聞くと、違反キップを切ることで警官にも、その何割かが収入として入ってくるが、それは1件につき100Bに満たないようで、給料日前など懐具合が悪くなってくると、小銭稼ごのために街の警官が増えるということなのだそうである。違反を見付けると勝ち誇ったように我々を攻めたてる日本の警官と比べると、ホノボノとした光景に見えてしまうから不思議だ。一種の買収であることは事実であるわけだから、犯罪であるのだが…。

このようなハプニングを含めて、15日と16日はボンラックさんの運転する車で、あちこちつれて行って頂いたが、大変楽しい2日間であった。19日の送別会でまた会えることを楽しみに別れたが、当日ボンラックさんの姿が見えない。心配性の私は、嫌われることをしてしまったのかと自分の行動を反省していたが、20日、空港に見送りに来てくれた。話しを聞くと風邪をひいて寝込んでしまっていたそうである。やはり日本人が感じない寒い日というのが存在したようである！？

今後タイを訪ねる方のために、現在の物価について触れてみたい。90年12月の為替レートは1B＝約5.5円であった。通貨だが、一番大きな紙幣が500B（約2,750円）で、一番小さな硬貨が50サターン（約3円）であるが、1B以下は切り捨てになることが多く、あまり使われていない。その間に100B紙幣、50B紙幣、20B紙幣、10B紙幣と硬貨（最近、発行になった）、5B硬貨が2種類（大きさの違いのほか、発行時期によってデザイン

が違っている！)、2B硬貨、1B硬貨も2種類(これも同じ)で、慣れるまでに時間がかかった。500Bが1万円の値打ちがあると考えて物価をみると、だいたいのものの値段がつかめるようで、まず円に換算して「×4」をすると良いようだ。

まず食べ物だが、市内のレストランで、タイ料理を1品オーダーするとだいたい80～100B(440～550円位)で、同じものを日本のタイ料理店だと1,200～2,000円ぐらいになる。だから約1/4ぐらいの感覚である。昼食や夕食は、だいたい5人で飲み物を含めて、約1,500B(8,250円)ぐらいで充分腹を膨らますことができるようである。しかし今回泊まったような中級ホテルで、朝食(バイキング)をとると200B+税金が8.3%で、約216B(約1,200円)になり割高感があることは否めない。やはり外国人価格になってしまうようだ。宿泊費はツインとシングルでの違いはあまりなく(10対8ぐらい)、ツイン1泊1,400B+サービス料10%+税金10%で、約1,700B(約9,350円)でシティホテルに泊まった気分が味わえる。チップについては、10Bぐらいが妥当な線である。朝早くから夜遅くまで、道のあちこちに屋台が出ていたが、衛生面、特に水をどこから持ってくるのか不安なものがあったので、食べてみることはしなかったが、40～50Bも出せば腹を膨らませることはできるようである。果物は豊富で、ものによっては日本の1/10ぐらいの価格のものまである。

交通機関については、タクシーは距離や国籍などでレートが変わるが、3～5kmぐらいの距離は80～100B(約500円)、サムローは同じ距離で40～60B(約300円)、バスはどこまで乗っても3B(約16円)である。そのほか、バイクタクシー(後部座席に乗る)や乗合いトラックなども走っている。しかし、窓が全開であり、空気の悪さや危険性を考えると、話しの種にサムローやバスに乗ってみるぐらいに留めたほうが良いのかも知れない。料金は事前に交渉して決めるので、このやり取りも一つの体験ではある。道路は左側通行だが、割り込みや進路妨害などは日常茶飯事であり、信号機の位置も違い、我々には恐ろしくて運転は出来なさそうであった。またバスなどは整備不良のものが多く、黒煙を上げて走っている。

衣料品は、一概にいけないが日本の価格と比べると1/2～1/4ぐらいのようだ。貴金属や時計、電気製品に関しては、あまり違いはないようである。また車両に関しては逆に税金の関係で日本の価格の5～10割増し(車のデザインはアメリカ的である)。だから、タイの人にとって、車や電気製品は「高値の花」という感じがした。しかし、電車や地下鉄などの交通機関が発達していないので、車やバイクの需要はこれからもますます高くなっていくこと確かのようにあり、ますます交通渋滞は進んでいきそうである。

バンコク市内では、1階を小売店(果物屋やバイク修理店など)にした3階建てのアパートをよく見掛け、政府の住宅政策で、中流家庭(土地を持たない市民)のために街のあち

ここにこの建物が建てられ、そこに住むように指導されている。郊外ではもっと安いらしいが、中心街にあるものは、約200万B（約1,100万円）で20～30年で買取る形である。月々の返済額が約8,000Bぐらいになり、「家計の中で結構負担になるのでは？」とタイの方に聞いてみると、1階の店からの収入や3世代ぐらいで住み、それぞれの収入を合わせれば、どうにか返済はできるそうである。スラム街にも、この形態のアパートが建てられており、政府からの資金援助などがあり転居できるようになり始めているそうである。

書きたいことは、まだまだあるがこの辺で終わりにしたい。また機会をみつけて、タイへ行き、もう一度彼らと会ってみたいと心に決めている今日この頃である。

○ 松田美博「タイの農村を見て」

今回のタイ訪問では、帰国青年5名と再会できた。特に、ソムヤット君とチャチャワン君は大きな花束を2つ持って、空港まで出迎えに来てくれたことは、本当に嬉しかった。来日した25名の農村青年は全国に分散して居住しており、バンコクへ出向くにはあまりにも遠く、また電話もあまり普及していないため、残念ながら多くの青年との再会はならなかった。しかし、その代わりほかの帰国青年が数多く集まってくれて、調査に同行してくれたり、市内の案内などのお世話をして頂いた。

ホームステイは、ソムヤット君（都市）とチャチャワン君（農村）の2家庭に受入れてもらい、家族や地域の住民の歓迎を受け、タイの農村について、次のようなことを見たり聞いたりした。

タイの農村は、自然が想像以上に豊かで、農地も計画的なローテーションで利用されており、水稲、野菜、工芸作物、樹園地など、すべてが水路と一体的に区画されており、それが美しい田園風景を作っている。また、道路は幹線の国道から外れるとほとんどが未舗装で、凸凹道であるが、河川に架かる橋は永久橋であることが多かった。

農村の家は、日本の集落形態とは異なり連担的に家々が並んでいるのではなく、所有している農地の中に、一軒だけ独立して建っている感じである。また農業労働者（土地を持たない階層）を、その庭先に住まわせている例が多く見られた。それらの労働者の家は、ほとんどがヤシの葉で葺いた屋根と竹で編んだ簾で囲った簡単なものであった。

また必ずといって良いほど農家は、水路または河川と密接に繋がっており、炊事用や飲み水は天水（貯蔵している雨水）を使っているが、洗濯や食器洗いなどの日常的な用水は、水路または河川の水を利用している。また、どこの農家でも軒下に大きな瓶を数個用意しており、屋根の雨水を集めて蓄えておけるように工夫されている。各農家を訪問すると歓迎の意味合いも含めてかならずグラスに水を出してくれだが、澄んだきれいな水で、貯蔵している雨水だということである。また、衛生的には若干の問題はあると思われたが、総じて清潔好きであり、日本のような湯槽はないものの、風呂場には水瓶に綺麗な水が貯え

られており、身体を洗えるようになっていた。寝室には蚊やヤモリなどが自由に出入りできるので、蚊帳が必要である。

食事はパサパサした長粒種のごはんと、野菜、肉（豚、鶏）または魚貝類を鍋で煮込み、強烈な辛味のある味付け（トウガラシやハーブ類）がしてあり、1日に3回が普通だが、2回の日もあるとのことであった。内容的には、豊富な農産物を反映して質、量ともに良好であった。

そのほかに特筆したいことは、農家の周辺や農地には、コブラなどの毒蛇が草むらや水辺付近などの冷たい所に潜んでおり、細心の注意が必要なことである。ちなみに今回ホームステイした家のお父さんが、中庭でコブラに咬まれて3ヶ月入院し、自宅で1ヶ月の療養をしているが、まだ完治していない。タイの毒蛇は種類が多く、咬まれたときには、その蛇を捕らえて病院に持っていかなければ、血清の種類さえ分からないことがあるそうである。

多くの農村の人はゆっくりと暮らしている。そのリズムは河の流れと同じものと感じた。しかし、外国との関わり合いを持っている農家（蘭の花を日本に輸出している人々）は、まったく違った感覚でテンポの早い動作とその品質管理の厳しさをよく知っており、市場や価格などの動向には敏感であった。

最後にまとめとして、今回のアフターケアチームについて書きたいが、今回のタイ訪問は5名という小人数であったので、チームワークは大変良かった。けれども見学先などのニーズが全員違っていたため、出来れば同じ目的のチーム編成にして欲しかった。また、タイの国土が日本の1.4倍もあり南北に長く、交通の便もあまり良くないので、特に農業関係の者にとっては、最低でも農村部の調査には2週間の期間が必要であった。それから、今後アフターケアチームが青年の帰国後の継続的な協力や援助をするための調査を目的とするならば、メンバーの選考時に協力や援助を実施できる人を選んだり、実施段階では地方自治体にその運営を全面的に任せるなどの方法をとったほうが、より良いODA事業となるのではなかろうか。

それにもまして、今回のタイ訪問は大変有意義であり、この機会を与えて頂いたJICA、県当局へ感謝申し上げたい。また今後とも招へい事業の実施になお一層努力したい。

○ 茂野 好江

今回タイを訪れ、たくさんの事実を見る機会があったことに感謝している。特に印象深かったことは、多くの寺院を見る時間があったこと、現地の人々との交流ができたことである。そして私ごとではあるが、夏にホームステイで受入れた青年と再会し、行動を共にできたことが一番嬉しかったことである。

私がタイでホームステイした家庭は、夏の受入れのとき青年指導者グループの団長で来

ていたサーティッツさんで、日本で会ったときの印象（ガチガチの公務員）より好感の持てる人であった。彼なりに！？家庭的な雰囲気のある所を選んで、1日目は動物園、2日目は私の希望で、アユタヤまで車を運転してくれ、アユタヤ王朝の独特の建物を充分見学することができた。またサーティッツさんの子供たちに、すっかり気に入られてしまい、手を余す場面？もあったり、家庭内に溶け込めたという面では楽しいホームステイであった。ただ、2日目に予告なしに親類の家に連れて行かれた（アユタヤに行く前後に2ヶ所！）ので、心の準備をしていなかったのが戸惑ってしまったこと、もっと自然な形でタイの人やその生活に触れたかったという気持ちもあった。

タイに行く前からタイの教育制度に興味があり、今回、それについて見学したり、説明を受ける機会があった。それらを通して私が思ったことは、やはり「貧富の差」が子供たちの教育環境に大きな影響を与えているということである。小学校は義務教育であり、制度的には日本と同じである。しかし、プラティープ財団の方の話では、実際の就学率は学籍はあるが何らかの事情で通学していない人を含めて、60%ぐらいと大変低い。また中学、高校、大学と学年が上がっていくほど、就学率も低くなり、大学進学率は5%ぐらいになるそうである。

これは教育費が金銭的に裕福な家庭にとってはあまり家計の負担にならないので、その家庭の子供は高等教育を受けることができ、大企業や収入の安定した仕事に就くことができる。しかし、貧しい家庭、特に地方から仕事を求めて出てきた家庭の子供たちは、教育費が家計の負担になるため、小学校に行ったり、その上の学校に進学することができない。識字率が91%と言われているが、実際は兄弟の世話や仕事をしなければならず、教育環境は良いとは言えないので、もっと低いのではないと思われる。そんな状況に対して政府はどう考え、その対策はどうなっているのか疑問であった。

一方では、タイに進出している日本企業などが、大卒者の、しかも技術系の知識や能力を持った人ばかりを欲しがり、人材も不足しているそうである。また、学力のある労働者（公務員を含めて）にとっては、有り難いことと受け取られている。しかし、貧しさゆえに高等教育を受けられなかった人は、単純労働や日雇いの仕事にしか就くことができず、高収入を得る道は閉ざされている。裏を返せば、日本人は日本の国の豊かさに感謝しなければならないのかも知れない……。

スラムと言われるところにも子供たちはたくさん住んでいる。しかし彼らの多くは、家庭の事情で義務教育を途中でやめたり、行くこと自体、諦めざるを得ない状況にあるそうである。私たちが訪れたドゥアン・プラティープ財団では、近年「里親制度」という、子供たちが学習を続けられるように、金銭的なものを含めた援助制度を始めている。実際、日本からの援助も多いそうである。スラム街の中にある財団の事務所のそばには、財団の

運営する幼稚園と小学校があり、進学率も上がってきているそうである。そういう意味では、財団の事務所の近くに住む人は、比較的幸運なのかもしれない。だから、多くの国々の方々に、この「里親制度」にもっと関心をもってもらいたいと思った。

タイに滞在している間、色々なことを見て、そして聞いた。タイの人々はたいへん友好的であり、日本人も見習うべきだと感じた。けれどカルチャーショックといえることもあり、日本という恵まれた国に住んでいる者であるからだと改めて納得した。特に、ゴミの山から出る悪臭やトイレの紙がないことなど、レディである？私には、手に焼ける出来事も多かった。またバンコク市内の交通渋滞や排気ガスの臭いは、予想以上にすごいものがあった。しかし、スラム街を訪問できたことは、それだけでもタイを訪れた価値があったと思える。そこでは、子供たちが与えられた環境の中で逞しく生活していた。

今回「微笑みの国」と呼ばれるタイを観光客ではなく、アフターケアチームの一員として訪れ、フツと考えた。もし今年の夏、ホームステイを含めてタイの青年と出会わなければ、タイをこんな形で訪れることもなく、タイの実情に触れることはなかっただろう。だから、色々な面で日本とタイの友情関係がもっと深くなれば、もっと多くの人たちがタイの子供たちの状況を知ることができるようになるだろうと思った。そして今、私の中に再びタイを訪れたいという気持ちが残っている……。

○ 曾根 耕嗣

始めて訪れたタイ、バンコクでは、日本が冬ということもあって「とても暑い」という印象をまず受けた。またバンコク市内では車やバイク、トゥクトゥク（三輪タクシー）、ボクボク（乗合いトラック）の多さにも驚かされた。バンコクの発展していく勢い、人々の活気と発展途上におけるパワーをそこに見た。しかしその反面、騒音公害、空気汚染、衛生問題など無視することのできない問題もあり、それに対してタイの人々がどのように取り組み、活動しているのかに興味を持った。

今回のタイ訪問で一番印象に残ったのが、プラティープ財団の訪問であった。そこで聞いた内容は、一つはタイは、人口の70%が農業をやっている農業国であるが、最近では工業化への道も歩みはじめ、そこで生きる若者たちは農業だけの勉強だけでなく、工業に関する知識も求められていること。もう一つは地方から都会に出てくる若者や家族が多く、都会での失業率が高くなり社会問題となっていることである。その中で、特にバンコクが抱える大きな問題として、「スラム」が上げられるのである。

そのスラムの問題というのは、①住んではいけないところに住んでいる（住居問題）、②生活用水のたれ流し（衛生問題）、③収入が不安定（経済問題）の3つである。まず住居問題では、土地の所有者がスラムの人達に立ち退きを求め、家に火をつけることもあったそうである。衛生問題としては、排水をそのまま地面に流しており、気温が高く湿地の

ため、常に悪臭が鼻をつくようなところに住んでいること。そして、一番の問題が経済問題であり、スラムに住んでいる家庭は平均が5人家族で、父親の収入が一日約80バーツ、子供たちは、義務教育も終了せず、家計を助けるために路上で花の首飾り、新聞等売って稼いでいる。またスラムの住民の多くは、肉体労働に臨時で雇われ不当な低賃金と苛酷な労働条件を強いられている。プラティープ財団では、子供たちの教育のために、色々な活動を行っているが、親の承諾が必要なため、最終的には親の判断に委ねられるわけで、反対があれば子供たちは働かなければならないそうである。そして、見せてもらった活動内容のスライドの中で、子供たちがゴミの中から使えそうなものを探している写真を見せられ、アルニイさんから「タイでは、ものは大切に使い、使えなくなるまで使う」という話を聞き、それに比べて「日本人のなんと無駄使いの多いことか」ということを改めて考えさせられた視察であった。

最後に、私の感想をまとめてみると、まず今年のタイ青年指導者グループの受入れにおいて、7月に初めて友達になったタイの若者と再会でき、ホームステイや訪問先で彼らの暮らしぶりを見ることができたことは大変有意義であった。また滞在中お世話頂いた方々ともすぐに打ち解けることができ、多くの友だちを作ることができた。チェンマイの自然に囲まれた大学、経済的に不安定な状況に関わらないスラムの子供たちの笑顔の明るさ、色々な体験を通して、驚きとともに、私の中に「何か」が残った。そして、今の私ではスラムの子供たちに何もしてあげられないかもしれないが、少しずつ力になれるよう努力したい。また何時か、今度は個人的に行き、もっとタイの人々と仲良くなりたいと思う。

そして我々をお世話して下さいました JICA やタイの方々には感謝したいと思います。

○ 湊崎 和範「タイ訪問記～光と影」

- 年中ふりそそぐ太陽—ほとんど陽のあたらないスラム街
- 真夜中でも灯っているイルミネーション—電気のない生活
- 何の苦もなさそうに暮らしている金持ち
- 路上で新聞や花を売り歩く Street Children
- ホテルやデパートで鳴り響くジングルベル
- それとは無関係に道行く人々……

教えあげれば、際限がなくあげられそうな「光」と「影」。そらが渾然と一体となって存在しているといった感じが、タイへの一番の印象である。

12月12日7:00pm, 機内より初めて眼下に見下ろしたバンコクの街は、日本のどこかの街の夜景を見ているという感じだった。空港から市街へと向かう間の町並みは、看板がタイ語で書かれていることや、とんでもなく古そうな車が走っていることを除けば、異国に来ているというよりは、日本のどこかの街ちを見ているようで、ほとんど違和感がな

いのが不思議だった。

その理由の1つが、日本のものや日本にあるものがいたる所で見れたことだと思う。TOYOTA や NISSAN といった日本車も多く、グリコやヤクルトといった看板なども目立った。現在、800社を越える日本の企業が進出しているということにも驚かされた。

そして、あるとは思っていたが、そういった日本の企業の進出がタイでの問題になりつつあったり、現在すでに問題になっているらしい。その例をあげると、企業間での技術者の引き抜き合戦による平均賃金の上昇であり、またバンコクを中心とした首都圏の地価の高騰があげられる。首都圏と郡部では、賃金に2倍程度の開きがあるようだし、聞いた話しでは「通勤時間が、かつては30分程度で済んだものだが、今では2時間位かかる」というものであった。車の数の増加による慢性的な交通渋滞のためでもあろうが、それだけではないようである。どこかの国でも、遠距離・長時間の通勤が問題になっているが、タイ国におけるそれらの問題の原因が、他国（特に日本？）からの経済進出によるところが大のようであり、恥ずかしい思いがした。「真の国際化」を求めるのならば、自国の利益のみを優先するのではなく、その国の歴史や文化を踏まえた上で、実情に合わせた「協力」というものが必要であり、ソフト（物）を提供するだけでなく、ハード（技術）を提供する必要があることを改めて痛感させられた。

タイでの9日間の滞在中、自分自身が見ていた部分の多くは、タイの「明るい」部分だったと思う。しかし、3日目に行ったスラム街は、タイの「暗い部分～影」をかいま見た思いがした。バンコク市580万人の人口のうち、実に13%にあたる75万人もの人がスラムに居住していると聞き驚いたが、その生活環境の悪さにもっと驚かされた。犯罪、麻薬、汚水、ゴミ…といった社会問題の多くが集約されているような話しを聞き、環境の悪さなどは、実際にその中を見て確かめることができた。そして、忘れてならないと思ったのは、スラムに住む人々が、決して「怠け者」や「無能者」なのではなく、少なくとも社会の底辺を支える「社会の一員」であり、もし適切な機会が与えられればいくらかでも延びる可能性を持った人々も多いという事実である。スラム問題の解決は、タイの発展に大きく寄与できると思われた。またプラチープ財団で、金銭的な援助以上に、共に働いてくれる協力者、すなわち「人」がほしいと言われたとき、今の自分にはほとんど何もできないと思えたことが歯痒かった。そして、バンコクの交通事情やスラム問題を目の当たりにしながら、自分の身の回りの問題として捉えられず、どこか遠くの国の話としか感じられない自分が腹立たしかった。せめて、まず見てきたことを自分の回りに伝えていかなければならないと、強く思う。

タイの滞在中は、自分自身を省みる非常に良い機会でもあった。特に人間関係の在り方では良い勉強になった。タイの一番のプラスイメージ、それは人々の「笑顔」である。普

段から人々の笑顔は絶えないが、「サワディ・カップ」とあいさつすると、何とも言えない笑顔であいさつが返ってくる。日本の営業用スマイルと異なり、実に清々しい。異国の地であって、人々の暖かさは涙が出るほど嬉しかった。感謝の念でいっぱいである。

ぜひ機会をみつめて、もう一度行ってみたいと思う。

7. 提言

1) アフターケアチームに関して

まず今回の派遣において問題となったことが、JICA 枠で参加した松田さんが知らされていたアフターケアチームの派遣目的と、本協会が企画したプログラムとのギャップがでてしまったことである。事前に松田さんへ知らされた内容では「帰国青年と会って、具体的な協力がどのように展開できるのか、その調査および打合せのために派遣される」というものであり、本協会が企画したプログラムは「相互交流」「タイについての見識を深める」という意味合いを含め、今後の招へい事業に何らかのフィードバックできるような情報を得てくるということを目指していた。そのため、松田さんは全日程ホームステイするかもしれないとまで心に決めて、参加を希望していたようであり、また農業の技術開発関係の資料なども持参しての参加であった。しかしそのことを知ったのが、タイ側とのやりとり、本協会での人選など、すでにある程度内容が煮詰まった段階でのことだったため、できるだけ自主研修の時間を増やす形で対応し、その時間を使って、松田さんができるだけ初期の目的を達成できるようにしたつもりである。結果としては、最初のとっ掛かりとしての派遣としては、松田さんにも満足頂ける派遣になったつもりではある。

受入れを行うときもそうではあると思うが、目的が違う団員の編成でいくとお互いにスケジュール上やりづらい面があり、また派遣目的によっては、すべて団体行動で行うほうが良い場合と、必要最低限のところ（現地での打合せなど）だけ全員で行動し、具体的な行動は個々に現地の方と連絡をとって行ったほうが良い場合とがあると思われるので、アフターケアチームの在り方、方向づけについて、JICA 内でのコンセンサス作りをお願いしたい。また、それによつて実施団体の団編成にも色相が違ってくると思われる。

次にアフターケアチームも含めた今後の「相互交流」についての在り方について述べたいと思う。昨年一昨年の報告書をもつても今回の派遣においても、タイの帰国青年の我々に対する対応は、こちらが恐縮してしまうほど、親身になって行ってくれた。何らかの集まりや自主研修のとき、見学先にも連絡を取り合つて会いに来てくれたし、空港まで見送りに来てくれた。そんな中で、日本に毎年 150 名の派遣があるのに対して、5 名の派遣では、あまりにも「相互交流」としては寂しいものではなからうか？聞くところでは、日本のホストファミリーや合宿セミナー参加者がその後、帰国青年に会いにいったというようなこ

とが結構あるようである。一方では、海外旅行をしたことのないホストファミリーなどは、行ってみたいけれど現地についての知識はないし、個別では不安で行くことができないということで、取りあえずあまり得意でない英語での手紙のやり取りをしているという状況ではないだろうか。今回、タイにも同窓会の組織ができたようである。できればその同窓会と協力して、ホストファミリーの派遣団を送り出すことはできないだろうかと思った次第である。自腹を切っても行きたいと思っているホストファミリーは少なくないと思われるが、いかがなものであろうか。

2) 招へい事業について

今回の派遣において、特に気になった点を書き記しておきたい。それは、この招へい事業における NYB の在り方、関わり方である。

JICA タイ事務所の阿部所長から聞いた話しでもあるが、招へい事業に参加する青年の中には、ほかの日本への研修事業の選考から漏れた人間も若干ではあるが含まれているらしいこと、分野にあまり関係なく、どの団にも必ず NYB の職員が数名含まれており、お目付役的な立場をとっていること、つまり一般公募の参加者を押し退けて、何人かの枠はすでに NYB の内部で振り分けされているということである。他の国でも、このような状況を見受けられると思われるし、職員の養成という意味もあるのだろうが、数少ないこのような機会を、選考者サイドの意図が加えられてよいのだろうかという疑問が残った。

また今回の派遣においても、立地条件やその他の事情でそうなったのかもしれないが、ホストファミリーのほとんどが NYB 関係者であったり、プログラム上の帰国青年との懇談会や送別会に集まった帰国青年の参加者のほとんどが NYB 職員であったり、その中に我々が現地で会ったり連絡をとった青年しか顔を出していない状況であったりした。このことをかんぐって考えてみると、NYB 関係者のこの事業に対する考え方が見えてくるような気がしてならない。また同窓会の組織の今後の動向についてもしかりである。

つまり、私物化しているとまでは言わないが、NYB が招へい事業の「美味しいところ」を持っていつているように思われ、またタイ国内の連絡においても NYB 内部だけで取り合っているのではないかと思える場面が多々あり、今後の相互交流を推進するには、支障があるのではないかという印象を受けたのである。

それぞれの職員の方、特に帰国青年に対して我々は悪い印象はないし、逆に一生懸命お世話して頂き、感謝の念は絶えない。しかし、これからも招へい事業は続けられるであろうし、アフターケアチームだけではなくホストファミリー派遣団なるものもタイを訪れることがあるやもしれない。もし、より広く深い「友情計画」ということを目指すのであれば、いつか弊害が出てきてもおかしくないと思われた（例えば、同窓会の分裂や NYB 職員と一般参加者との溝の表面化など）。お世話して頂いて、こんなことを書くのは失礼か

と思えるのだが、今後の招へい事業のためと思い、一筆申し添えることにさせて頂いた。

最後に、改めまして、今回の調査チームが訪タイするにあたりご協力頂いた方々、JICA 招へい室とタイ事務所、NYB、そして帰国青年の皆さんに御礼を申し上げ、報告と致します。

コップン・カップ!!

韓 国

平成3年1月30日～2月8日

財団法人 世界青少年交流協会

1. 調査チームの派遣概要

1-1 調査チームの構成

	氏名	生年月日	性別	(上)現住所 (下)所属先
チームリーダー	白井千里	1950年 9月17日	女	〒503 岐阜県大垣市鶴見町 64-5 岐阜県世界青年友の会
メンバー	田中克典	1971年 9月13日	男	〒503 岐阜県大垣市 1-5 岐阜県世界青年友の会
メンバー	日野徹	1969年 8月12日	男	〒144 東京都大田区北糞谷 2-6-12 経験的日本語学習 参加青年
メンバー	牧野雄	1963年 9月24日	男	〒227 神奈川県横浜市緑区 十日市場町1296, 142-3 東京都世界青年友の会
メンバー	西忠雄	1950年 7月6日	男	〒180 東京都武蔵野市吉祥寺 本町2-13-8 財団法人 世界青年交流協会

1-2 調査日程

日順	月 日	曜	行 程	宿 舎 先
1	1991年 1月30日	水	午前：全日空907便にてソウルへ 午後：ソウル着 ホテル着 日本大使館訪問	瑞麟ホテル Seoulin Hotel
2	1月31日	木	午前：大韓生命ビル見学 教育部訪問 午後：中学校訪問 高等学校訪問	瑞麟ホテル Seoulin Hotel
3	2月1日	金	午前：陶窯地見学 午後：独立記念官訪問	瑞麟ホテル Seoulin Hotel
4	2月2日	土	午前：韓国青少年連盟訪問 午後：景福宮見学・国立中央博物館 夕方：ホームステイへ	ホームステイ
5	2月3日	日	午前：ホームステイ家庭と共に 午後：ホームステイ家庭と共に 夕方：ホテル集合	瑞麟ホテル Seoulin Hotel
6	2月4日	月	午前：第3トンネル見学 午後：板門店見学 夕方：民族舞踏見学	瑞麟ホテル Seoulin Hotel
7	2月5日	火	午前：特急セマウル22号にて慶州へ 午後：慶州着 慶州見学	コーロンホテル Kolon Hotel
8	2月6日	水	午前：特急セマウル22号にてソウルへ 午後：ソウル着 オリンピック公園見学 夜：韓国青年との意見交換会	瑞麟ホテル Seoulin Hotel
9	2月7日	木	午前：南大門市場・梨泰院見学 午後：自主研修 夜：韓国青年との交流会	瑞麟ホテル Seoulin Hotel
10	2月8日	金	午前：帰国準備 宿舎発 金浦空港へ 午後：全日空908便にてソウル発 成田着 通関後、成田にて解散	

1月30日(水)

- 8 : 30 新東京国際空港(成田)南ウイング全日空カウンター前集合
- 9 : 15 出国手続き開始
- 10 : 10 搭乗(予定より10分遅れ)
- 10 : 40 離陸 ソウルへ
- 13 : 00 ソウル金浦国際空港到着

入国手続き後、出口に向かうと昨年の韓国代表団副団長教育部権赫來氏、並びに教育部の金南一氏、金義鎬氏、通訳の崔貞玉さん、昨年の韓国学生代表団団員の金倫氏の出迎えを受ける。

- 14 : 10 瑞麟ホテル着
チェックイン後、スケジュールの説明を受ける。
- 15 : 00 在韓国日本大使館訪問
特命全権公使川島純氏と懇談
- 16 : 00 瑞麟ホテル着
ソウルの街散策
- 19 : 00 夕食「長安 蔘鶏湯」
- 20 : 15 ミーティング

1月31日(木)

- 7 : 30 朝食
- 9 : 30 瑞麟ホテル発(金義鎬氏、崔貞玉さん同行)
- 9 : 55 大韓生命ビル見学
地下3階、地上60階建、池袋のサンシャインビルより19メートル高い
- 11 : 15 教育部訪問
教育部社会国際教育局 金相球氏と懇談
- 12 : 00 教育部社会国際教育局社会教育振興課長 梁在君氏、権赫來氏、金南一氏、金義鎬氏と共に韓定食を戴く
- 13 : 25 藝苑中学校訪問
(芸術の私立専門学校)、高永寛校長先生、校寛監(教頭)、金玉煥(ソウル特別市教育委員会教育課青少年担当少学官室)と懇談、その後学校施設見学
- 14 : 00 藝苑中学校発
- 15 : 00 禮一学園訪問

5人の女子高校生に花を持って迎えられ、その後学園の小・中・高等学校の校長先生方と懇談

禮一学園の紹介スライドを鑑賞後、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の施設を見学

- 17 : 30 禮一学園発
- 18 : 00 瑞麟ホテル着
- 18 : 30 瑞麟ホテル出発
- 19 : 00 夕食 権 赫來氏一緒に参加される
- 20 : 30 瑞麟ホテル着

2月1日(金)

- 7 : 30 朝食
- 8 : 30 瑞麟ホテル発 利川へ
- 9 : 50 利川の窯場(作家:金 正黙)着
作業場にて作品の製作工程, 窯, 展示場を見学
- 11 : 00 利川発
- 12 : 45 独立記念館着
昼食後, 独立記念館見学
- 15 : 35 独立記念館発
- 17 : 25 瑞麟ホテル着
- 18 : 00 夕食 於: 韓一会館
- 21 : 00 瑞麟ホテル着

2月2日(土)

- 7 : 30 朝食
- 9 : 10 瑞麟ホテル チェックアウト
- 9 : 20 瑞麟ホテル発
- 9 : 55 韓国青少年連盟訪問
金総裁, 李 性雨院長, 黄研修2部部長と懇談
- 11 : 10 連盟紹介スライドを鑑賞後, 質疑応答
- 12 : 00 連盟内食堂にて昼食
- 12 : 45 韓国青少年連盟発
- 13 : 20 景福宮見学
- 13 : 45 国立中央博物館見学
- 15 : 15 国立中央博物館発

- 15 : 30 瑞麟ホテル着
- 15 : 40 ホストファミリーと対面
ホームステイへ
- 2月3日(日) ホストファミリーと共に
- 16 : 00 瑞麟ホテル集合
- 18 : 00 瑞麟ホテル発
- 18 : 20 夕 食
- 19 : 30 瑞麟ホテル着
- 2月4日(月)
- 7 : 00 朝 食
- 8 : 30 瑞麟ホテル発 板門店へ
自由の橋
滅共会館
第三トンネル
統一展望台
昨日の雪の為、予定していた板門店へは行けず
- 13 : 30 昼 食
- 15 : 15 瑞麟ホテル着
- 16 : 00 瑞麟ホテル発
- 17 : 00 シェラトンホテル着
- 17 : 30 夕 食
韓国伝統舞踊を見る
- 21 : 00 瑞麟ホテル着
- 2月5日(火)
- 7 : 00 朝 食
- 8 : 15 瑞麟ホテル チェックアウト
- 9 : 00 特急セマウル 21号にて慶州へ
- 11 : 45 昼 食
- 13 : 05 慶州着
- 13 : 15 大陵園見学
天馬塚見学
- 13 : 50 大陵園発
- 14 : 30 石窟庵石窟見学

石仏見学

- 15 : 10 石窟庵石窟発
- 15 : 20 佛國寺見学
- 15 : 55 佛國寺発
- 16 : 00 慶州コーロンホテル着
- 18 : 00 慶州コーロンホテル発
- 18 : 30 夕 食
- 20 : 00 慶州コーロンホテル着

2月6日(水)

- 7 : 30 朝 食
- 8 : 20 慶州コーロンホテル チェックアウト
- 9 : 15 特急セマウル 22号にてソウルへ
- 12 : 10 昼 食
- 13 : 20 ソウル着
- 13 : 50 瑞麟ホテル チェックイン
- 14 : 15 瑞麟ホテル発
- 15 : 20 オリンピック公園見学
李 一宰氏の説明を聞きながら各施設を見学
- 16 : 45 オリンピック公園発
- 17 : 30 韓国青年との意見交換会

2月7日(木)

- 8 : 00 朝 食
- 9 : 05 瑞麟ホテル発
- 9 : 25 明洞着
明洞見学
南大門市場見学
- 11 : 00 南大門市場発
- 11 : 15 梨泰院着
梨泰院見学
- 12 : 05 昼 食
昼食後自主研修
- 17 : 30 韓国青年との交流会

2月8日(金)

- 8 : 00 朝 食
11 : 20 瑞麟ホテルチェックアウト
12 : 40 金 義鎬氏, 崔 貞玉さんに見送られ出口手続きへ
13 : 45 搭 乗
4 : 10 離陸 (10分遅れ) 成田へ
16 : 15 新東京国際空港 (成田) 着
16 : 55 入国手続き全て終了
17 : 35 新東京国際空港にて解散

1-3 主要面談者

- 1) 1月30日 (水) 於：在大韓民国日本大使館

面談者：特命全権公使 川島 純氏

- 2) 1月31日 (木) 於：教育部

面談者：教育部社会国際教育局長 金 相球先生

教育部社会国際教育局社会教育振興課長 梁 在君氏

教育部教育施設局 權 赫來氏

教育部社会国際教育局社会教育振興課 金 南一先生

教育部社会国際教育局社会教育振興課 金 義鎬氏

- 3) 1月31日 (木) 於：藝苑學校 (ソウル藝術高等學校併設・中學課程)

面談者：藝苑學校校長 高 永寛先生

藝苑學校校監 (教頭)

ソウル特別市教育委員会社会教育課青少年担当奨學官室 金 玉煥先生

(同席)

- 4) 1月31日 (木) 於：學校法人禮一學園

面談者：禮一學園學園長・教育学博士 金 禮桓先生

禮一国民學校校長 金 鍾仁先生

禮一女子中學校長

禮一女子高學校長

ソウル特別市教育委員会社会教育課青少年担当奨學官室 金 玉煥先生

(同席)

- 5) 2月1日 (金) 於：韓国青少年聯盟

面談者：韓国青少年聯盟總裁 金 先生

韓国青少年聯盟研修院院長 李 性雨先生

韓国青少年聯盟研修2部部長 (国際交流) 黄 徳三先生

2. 調査の概要

韓国は他の ASEAN 諸国と異なり未だ同窓会組織がなく、ASEAN 諸国へ行かれた他のアフターケア調査団と状況は異なっている。そのため、第一回韓国アフターケア調査団は、韓国・教育部と昨年度学生代表団の権氏（教育部）並びに在韓国日本大使館のご協力により、僅かな準備期間にも関わらず大きな成果を得る事が出来た。

今回のアフターケア調査団は、過年度の韓国青年招へい事業に直接関わったプログラムコーディネーター、合宿セミナーの日本側リーダー等によつて構成し、

「韓国青年招へい事業」に参加した青年との再交流を図る

韓国の現状を知り、「韓国青年招へい事業」のプログラムに反映させる

この2点を中心に訪問をした。

本調査団は冒頭に記した受入れであるが為、本調査団の意図するところとずれ違う場面があったことは残念であったが、その他については10日間韓国で様々な訪問・見学が出来た。その詳しい報告についてはそれぞれの項目で報告することとし、ここでは省略させて戴きます。

今回の調査団一行の希望として、今回のアフターケア調査団の訪問を一つの機会として、韓国に再交流活動をより発展させる為の同窓会組織作りに進む事を願いたい。

最後に、今回の調査団の成功は韓国側・教育部並びに日本側関係者のご尽力によってなされたものと考えている。

3. 現地活動報告

3-1 表敬、訪問先における意見交換内容

① 1月30日（水） 於：在大韓民国日本大使館

1月31日に予定していた表敬訪問が、大使館の日程調整により1日繰りあがる。瑞麟ホテルに大使館の鎌田氏のお出迎えを受け、日本大使館を表敬訪問。

川島公使の多忙なスケジュールの中、表敬の時間を都合して戴く。

就任されて間もないというが、1月の海部総理の韓国訪問の折りにも、青年交流の意義を強調された話など、韓国青年招へい事業を過去三年間における実績に、直接の担当をした立場で。プログラム作成、青年が日本で得た知識・印象など話が具体的であったせいか公使にも充分理解して戴いた。

日本大使館として、韓国の人々に日本語講座を開設していることや、文化講座の話等も交えた国際交流の状況も得ることが出来た。

② 1月31日（木） 於：教育部

今回のアフターケア調査団の韓国の受入先でもある教育部社会国際教育局長金 相球氏を表敬訪問。